晦冥の底から

歌瑞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
晦冥の底から

【Ｎコード】
Ｎ０６９９Ｖ

【作者名】
歌瑞

【あらすじ】
気が付いたら真っ暗闇でよくわかんないとこにいました。
わたしは何も見えなくて歩く事すらままならないのに、普通に動けてる人がいて、助けてもらいました。頼りっきりで申し訳ないです。
すごくいい人です。
…いいヒト…だよね？
※※※てっぺんから爪先まで人外と平凡な女の子のじりじりした勘違い系相互理解でちょっとずつ距離が縮まる様をニヨニヨしながら綴るおはなしです。たぶん。※※※

1　Encounter（前書き）

擬音多めの文体で綴る予定です。

1　Encounter

真っ暗で周りが何も見えない。

ばららららッ
連続して小さい破裂音。光っ…たかもしれない、遠くてよくわからない。

きんかきんきんきんきん
硬いものが硬いものを弾いているような音。
音の合間に、ちりんちりん、って金属が落ちるような音や、足音、ぽい音も不規則に聞こえた。

どっ、がっ、ずばしゃッ
…えーと、よくわからない、ぶつかった後になんだか水っぽい…
…微妙に固形っぽい……何かが叩きつけられたような…

しーん。
…うん、今度はなにも聞こえない。絶対さっき派手に音をたてた何かがいるはずなのに、異常なくらい何も聞こえない。

こわい。
ぶるぶる震えてうまく動かない手を、そうっとそうっとずらした。
指先に触れているのはたぶん石の、レンガ？　タイル？　真っ暗

で全然見えないけど、ざらざらして平らで硬い感触が定間隔で引っかかるカンジから、そうなんじゃないかって思うんだけど。たぶん石の壁。ひんやりしてる。
ここどこ。人工の建物ぽいってことしかわからない、何も見えなくて。なんだか埃っぽいから、古い建物なのかもしれない。
……とにかく。ヤバイのがいるのは間違いない。あれ、銃の音だと思う。
銃声なんか聞いたことないから、ホントにそうかっていわれたら自信ないけど。ホントだったらこわい。ヤバイ。近寄りたくない。気付かれないほういいはず。

音を立てないように、足を一歩…

じゃり。

……！

持ち上げようとしたけど思い通りに動かなかった、靴底が擦れて

———

ば、ざっ
「ふぐうっ！？」

耳元で、違う真後ろで音が、首、絞められ、
「むううううう！！」

暴れたつもりだけど手も足も動かなくなってた。ぎゅうって押さえつけられている。何に？
石壁じゃない、ごつごつして、つるつるで、わたしの身体に絡みつくみたいにぐるっと何かが囲ってて、顎が痛い痛いいたい！

みしっていった、顎が歪んで、口の中の奥歯がヘンにずれてる――！

痛みで息も出来なくなるかと思ったら、急に緩んだ。あ、首も別に絞められたわけじゃなくて、押さえつけた拍子に詰まりました、みたいな？

ゼイゼイ肩で息をしながら、呼吸ができてることにそう思った。

きるぎきゅる、ぎゅる

何かを擦り合わせるような音が耳元でした。鳥肌たった。

アレだよ黒板とかガラスを引っかく系の。

ぎきゅるぎ

「っひぃ」

産毛が全部逆立つような嫌な感触に身じろぐと、それは止まった。身体は動かせないままだ。自分の心臓がすごくどくどくいってて、その拍子に合わせて胴体が揺れているのがわかるくらい。

きゅうぃーん、かたたた、ぴぴっ

…え、今度は機械の作動音ですか。ぴぴって。

それにしても痛い、背中のほう、出っ張ってるのが食い込んでて痛い。

「？？？？？」

「すいません何言ってるのかわかんないですううう」

「人間か」

そう問われて一も二もなく頷いた。

「人間ですううううう！！」

いやなんか無駄に美声だった。

そんなことをゆるゆる戒めを解かれながら考える。足裏が平らな、おそらくは床に触れて、自分がそれまで足もつかないような状態だったことに今さら気が付いた。

「なぜ人間が五拾弐番区などにいる？」

ごじゅうにばんく。それはどこだ。美声だけどなんか、電子音声みたいなノイズ混じってないだろうか。

「わかんないです。ここどこなんですか」

銃だとか、さっきの聞いたことない言葉とか、真っ暗闇で何にも見えない石壁のここだとか、まったくもって現実離れしている。実はこれ夢だったりしない？

生まれたてのバンビちゃんみたいにがっくがくの足でどうにか立った時に、うなじをべろっと何かが撫で上げて思わず反り返った。

ななな何！
「認識票がない。抜いてもいないようだが。なぜ日本語を？」
「なぜって日本人だからですよ」
…撫でたのアナタですかセクハラで訴えますよ。
「血統が残存しているという話は聞かんな。複製か、不正規交媾産か？」
声がずいぶん高い位置から降ってくるなあ。すごく背が高そうだ。
……話の内容はなんか理解できない。

「…貴方は日本人じゃないんですか」
日本語話してるのに。
「違う」
……そうですか。ここどこ。ごじゅうにばんくとか知らない。
じわじわとイヤな予感に侵食されて、頭の中の空元気テンションも落ちていきそうだ。

「まあいい。出自よりもここにいることが問題だ。来い」
微かに空気が流れて、すぐそこにあった何かが動いたのはわかった。
え。ちょっと。

慌てて両手を突き出し恐る恐る足を一歩踏み出す。何にも触れない。
ついさっきまでこのあたりにいなかった？　声がしてたのに。
足音聞こえてないよ！？
「ま、待って」
もう一歩。何もない。

もう一歩。何もない！　暗闇しか！

「待ってええええ」
こんな真っ暗なとこに置いてけぼりにしないでー！
マジ泣きしそうになったら手のひらがぺたんと硬いものに触れた。
「空間を認識出来ていないのか」
「なんにも見えないよ！」
ぺたぺたぺた、ああよかった、ここにいる！
きるぎぎゅい
またあの擦れる音がして、唐突に身体を折りたたまれた。
背中と膝裏に当てられたものに自分の全体重がかかってる、右側にある何かにぎゅって押し付けられて、空気がぐるんって回る――――！

ばたたたたたたっ
「ひあああああ！！」

足先で、破裂音と一緒に閃光が瞬いた。
一瞬で見えたもの。
わたしの脚より太い腕が真っ直ぐ伸びて、その手が持つ大きな銃の先から四方に光がふきだしてた。
どっちも黒っぽくてごつごつしたシルエットで、視界の下の方にあった自分の脚がやけに真っ白でつるっとして見えた。

すぐに暗闇に戻って、ちゃりんちゃりんちゃりん、金属製のなにかが落ちる澄んだ音がして。
ちょっと遠くで、苦しげに乱れる呼吸が聞こえるような気がするのは気のせいに違いない。

ばたたたたたっ
「いやあああ！！」
とどめ！　とどめさしたこの人！

うん、ずいぶん低いっていうか広いっていうか、人間よりおっきい生物っぽい呼吸音だったけど！
迷いなし！　容赦なし！

音と衝撃波できーんってなってる耳を押さえてがたがた震えながら、はたとさっき見えた光景を思い出す。
位置とか、角度的に、たぶん、おそらく。
わたしの身体を折りたたんで、かつ支えているものって、この人の、左腕、一本じゃないだろうか。
やっぱり足音はしてないけど、自分が微妙にゆらゆら揺れてるのはわかる。歩いているんだろう。

「…わたし、重くないですか」
大きな声をだすのがなんだか憚られて、なるべくひそめて訊いたらすぐ近くから美声がかえってきた。
「荷重は問題ない」
……重くないってことだろうか。
わたしの脚一本より腕のほうが太いのだから、この人にとってはたいした重さじゃないのかもしれないけれど。
どれだけでかいんだろうこの人。
「どこいくんですか」
「取り敢えずは地上だ」
おどろきのしんじじつ。目指すところが地上ですと。
「ここ、地下なんですか！」
「そうだ」
だから真っ暗なのか。
「貴方はここで目が見えてるんですか？」
「知覚はしている」
……なんだか、固いっていうか、変わったっていうか、不思議な言い回しをする人だなあ。

こんなに暗いのにどうして見えてるんだろう、すごーく夜目が利くとか？
「さっきの、動物？　あれは何なんですか？」
「滓だ」
おり？
そんな名前の生物知らない。

やっぱりここは、知らないところ、だ。

「わたし、家に帰りたいです」
「何処から来た」
「来たっていうか、いつのまにかここに居たんですよ。日本の
きゅぎいっ

またその音、美声とおんなじ位置からとか近いよぞわぞわするからやめて――――！
ぐるん。さっきのぐるんは横方向だったけど、今度は縦にぐるんした。
舌噛んだ！　舌！

ばたたたたっ
ちゅんちゅいんいいいん
「ぎゃあ――――っ！」

四方八方に火花が飛んで、見なきゃよかったのに特に明るかった場所、真下を見てしまった。
虫！
なんか脚いっぱいあって節がいっぱいあるあれはまぎれもなく虫！
サイズがありえないカンジだったけど絶対虫！

ひゅ、と内臓が浮き上がる感覚がして、自分が落下してることに気が付く。
真下、虫！
「いやあああああ！」
どっ、
べきぐしゃっ
硬いのが割れて潰れる音とかいやあああああああ！
銃の弾丸を弾くような硬い虫ってどんな生物なのかとか、そんな生物をおそらくは踏みつけて潰す人ってなんなのとか、かなり高いトコからの落下だったっぽいのにあんまりわたしには衝撃がなかったとか、そんな疑問もうさっぱり考えてられないくらい気持ちが悪いい！
がっ
下の方で何かを叩きつける音がして、わたしの身体はなぜか斜めに重力を感じた。
え、この人上体斜めにしてない？　屈んでない？　まるで足元を覗きこむような姿勢になってる気が。
ばたたたたたたっ
ひい――――！
すぐ下から聞こえるぎちぎちとかびちゃびちゃとかそんなものは知らない、聞かない、絶対見ない！
とにかくちょっとでも音源から離れたくて、わたしはその人にびったり張り付いた。

斜めで不安定で、落ちたら嫌だ、ちゃんと、しっかり、何かに掴まりたい――――！

べたべたと両手でまさぐって、ちょうどよく両腕がまわるところにかじりつく。

虫とか！　暗闇で虫とか！　勘弁して！

1　Encounter（後書き）

今後の展開でイケメンを期待している方は退避おすすめ。
いえ私はイケメンだと思ってるんですけどね！

2　Consensus

それから、彼の一方的な殺戮はちょくちょく続いた。

いや、わたしが一人であの謎な生物達に遭遇してたら、間違いなく3秒以内に死んでたはずだ。そういう意味では正当防衛、彼のおかげでわたしは生きている。

とりあえず、ここは、日本じゃないんだな。

うっかりすると地球ですらないかもしれない。

そう認識した。いろいろあり得ないものを銃の閃光の中で見たよ。でっかいピ――とか、口がむっつに裂けるピ――とか。鮫みたいな牙を生やした猫サイズのネズミはまだかわいいほうだったと思う。いえ大群でわらわら湧いてきてパニックになったのでもう見たくないですが。

なによりいちばんあり得ないのは、それらを全部退けて、助走もなしにわたしを抱えたまま垂直に数メートル跳んだり、肺の中の空気が絡め取られるくらいの速さで走ったり、それだけ動いてもまったく呼吸が乱れなかったりする人なわけだけど。

それでもわたしは彼に抱えられてその首にしがみついていた。

何も見えない暗闇の中で、彼しか頼るものがないっていうのもあ

るけれど、この人何なんだろうって怖々触れていたわたしとおんなじに、彼もわたしの取り扱いに恐々としていた事がなんとなくわかったからだった。

どうやら、最初に足音もなく歩いていたのは、ものすごく慎重にゆっくり歩いた結果らしかったのだ。

彼は『オリ』と呼ぶ生物と立ち廻りを繰り広げながら、わたしがしんどいと感じる加速や力加減を読み取って、調節してくれていたらしい。

振り回されて息が出来なくなるとすぐさま緩む、そういうことを何度かくり返して、今はわたしの負担にならない最適な速さで走っているから。

思えば一番最初、押さえられた顎がものすごく痛かったのも、力加減がわからなかったのではなかろうか。

じゃあ逆に、本気を出したらどうなるのかって考えると、ちょっと恐ろしいけど。

わたしを抱える左腕はジェットコースターのセーフティバーみたいに、一定の位置でぴたっと動かず締め付けもしないし緩みもしない。

腕が痺れないかこっちが心配になるくらい動かない。

揺るがないのは、そのまま安心につながった。

とりあえず、ここは、わたしの『普通』が『普通』じゃないところ。

いろいろあり得ないことばっかりだけど、彼に付いていけば何と

かなるかなあ、と、思い始めていた。

※　※　※　※

たたたたたっ
至近距離の銃声に、はっとなってわたしは目を覚ました。
おおう…いけね一瞬寝てたぜ。
こっそりヨダレを手の甲で拭ったけどばれてるかな、ばれてそうだな。

正直な話、わたしはへとへとだった。
『オリ』は絶えることなく次々と出てきて、彼はずっと走り続け、休むことがない。
一時間とか二時間とかそういうレベルじゃない、十何時間とかだと思う。
時計がないから体感でしかないけど。
一度はわたしを降ろして休憩を取ってくれたんだけど、一定の場所に留まっているとオリがどんどん集まってくるみたいで、結局すぐに移動せざるを得なくなった。
そうしてそのまま、彼の左腕に抱えられて、ン時間。

ぶっちゃけいろいろ鈍麻してきているんだろうと思う、疲れすぎて。

オリは見た目が怖いけど、全部さくっとやっつけられていくのだ。彼が居ることの安心感はハンパない。さらに走りも安定、ほんとにすごく気を遣ってくれてると思う。

それで、おなかがすいて、へとへとで、でもなんか大丈夫っぽいなーとか思っちゃうと。

人間ってこんな状態でも寝れちゃうんですね。てへ。

…いやすいません、暢気に寝るとかずっとわたしを運んでくれてる人に申し訳ないよね。

ぼーっとする頭をぶるぶる振って、欠伸をかみ殺した。

せめて起きてなきゃ。

しっかりしようと彼の首にまわした両手を握りなおして決意を固めた。

のに、彼のほうが失速した。

ええええごめんなさいお怒りですか！

「体温が低下傾向にあるが」

そう言いながら彼はゆっくりと屈んで、わたしの足裏を床につける。降ろすつもりなんだろう。

「どうした。自覚しているか」

よかった、ヨダレでお怒りではないらしい。

わたしはこつこつと爪先で位置を探りながら、自分の両足で立ち上がった。

うん、自分がふらふらしてるのが真っ暗でもわかります。パパ抱っこー！　とかいったらドン引きされるかな。

「おなかがすいて、眠いからだと思います」
だから抱っこ所望。
立っているのがしんどくてふにゃふにゃゆらゆらしてたら両肩を押さえられた。肩甲骨のほうに指先があたってるっぽい、手のひらもでっかいなあ、この人。
「五拾弐番区に人間が栄養素として摂取可能なものは恐らく無い。隣区まで移動に後４５時間程かかる。それまで生命維持できるのか」
よんじゅうごじかん！
「先に脱水で死にそうです」
のどかわいた。

…

「水も必要か」
「ハイ」
ちょっとなんか間があったね。
なんだろうホントに規格外だなこの人。いや水がないと死ぬわたしのほうが規格外なんだろうか。そうなんだろうなあ、このカンジ。
「水があればたしか一ヶ月くらい、生きるだけならできるらしいです」
「切迫するのは水なんだな。それならば調整できる」
ぎちっ
また何かが擦れる音がした。
「噛むなよ」

「んむ！？」
口の中にいきなりなにかが滑り込んできた。
それが何なのか確認する暇もなく、どっと液体が溢れてきて、思わず飲み込む。
なにこれ水？！　あ、ちょっと甘い。
すごく喉は渇いていたから、夢中で吸う勢いでごくごく飲んだ。
満たされて人心地ついたところを見計らったように、それが引き抜かれる。
「グルコースを微量添加した。足りるか？」
「…お水美味しかった…」
あとは眠れたら幸せです。
どうにもこうにもまぶたが下りてきてしまって、首をかっくんかっくんさせてるわたしの身体を、彼が抱え上げる。
きゅるきゅるきいっ
うん、その擦れる音、たぶん愚痴とか悪態系の独り言いってるんだよね。過去の使用場面から鑑みると。
なんとなくそう思いつつ、脳ミソがとろけるように思考が拡散していって、わたしは睡魔に屈服したのだった。
まあいいか、彼はきっとわたしを置いていったりはしないだろうから。
そうかー、生声ぜんぜん別物なんだなー……

ぐう。

2　Consensus（後書き）

彼は素嚢を持っているのでした。

3　Familiar

たたたん

「起きたか」
んん。

もっと寝ていたい。

大きな音でちょっぴり浮上した意識を察知するとか、えすぱーですか。読んでますか。
閉じたままのまぶたをそこにあるものにぐりぐりとこすりつけ、呼気を吐き出すついでにだらっと力を抜いてもたれかかった。
もう銃声なんかじゃ覚醒しきれません。いくらでもぐうぐう寝れますよ。

…でも枕がごつごつして硬いのが不満です。

「地表では自動二輪を使う。一度目を覚ませ」
うわあもしかしてようやく地下から脱出なのか。
何度か寝て起きたけど、目を覚ませとか今まで言われたことなかったよ。これは起きねばなるまい。

上半身を起こし、目元をこする。
単なる反射的な運動で目を瞬いたら、予想外の刺激に眼球が痛みを訴えた。
「うあ」

突き刺すような白色が、遠い向こうできらめいている。
待って、なにその先の白いの、ちょっとまってヤバイ――

彼の脚は早い。
視界を食い破るがごとくみるみるうちにそれが近づいて、制止の声をあげる間もなく、暗闇を切り裂く圧倒的な光の下へ辿りついた。
「ああぅ！」

なにこれ痛い！！

数日にわたって暗闇ばかりの世界をすごした瞳に、それは暴力も同然だった。
まぶたをぎゅっと閉じても皮膚を透過し貫く光で視界が赤に染まる。
たまらずに手のひらを当てて両眼をかばったが、光を防ぐには厚みが足りないらしい。拳をつくって少しの隙間もできないようにまぶたの下の眼球に押し当てる。

がんがんする――！

「どうした」
頭になにかが触れた。たぶん彼の右手。
「まぶ、し…っの」
あれ、なんか呼吸もしにくい、すごく、空気が、暑い――？

頭を囲うように置かれていた手がそろそろと顔のほうへ移動し、わたしの両の拳を覆った。
ん、楽になった気がする。
「ここはまだ影の中だが」
まじですか。どおりで下向いても横向いてもあんまり変わらない、

これで直射じゃないなんて。
「痛むのか」
こくこく、頷いた。
あなたはなんともないんですか！
わたしと同じかそれ以上の長時間暗闇の中にいたはずのに、この平常さ。
慣れとか順応が早いとかいう話じゃないよね。やっぱりそもそもの『つくり』が違うんだろう。

「少し待て」
ざりざりざり、
数歩あるいたカンジ、砂利の多い砂地、かなあ。
あ、右手が離れた。

がしゃばこんっ
おや聞いたことのない新しい音。うーん。クーラーボックスみたいな、厚みがあって中が空洞なものの、蓋開けた音？

ばさっ
うわっぷ。
布ですね、なんか被せられた。重みがあるから、たぶんだいぶ厚くてしっかりした布地。

「遮光布だ。ほぼ遮断される」
そう言いながら、わたしをぐるっと覆うように包むためなんだろう、左から右腕、また左腕へと持ちかえられてこねくり回される。
最終的には簀巻き状になって、何かの上に座らされたようだった。
遮光布――――光を通さないんだっけ。

恐る恐る、拳をずらす。
ぱちぱちと瞬きを何度かしてみたけど、暗くて痛みはなかった。
「……平気、みたい」

だけどこれ蒸れる、窒息しそう。暑い。
「でも息できないです」
「わかっている。もう少し待て」
足元の布がもぞもぞ動いたかと思うと、びーっと軽快な音をたてた。
うわあ裂いてる。
「目を塞げ」
簀巻きの上部にぐっと力がかかるのを感じて、慌てて両目に手を当てなおした。

彼はすばやかった。
べろっと剥かれたかと思うとあっという間にぐるぐるぐる、頭に細い布を巻かれて目隠しされる。
ついでに簀巻きも全部はがされて巻きなおされて足先からじーっとジッパーを上げる音が首元まで。
最後に仕上げとばかりに背中から引っ張った布を頭にぼふっとかぶせられた。
フード付きのコートっぽい。

なんかすっごい腕の中で転がされてた気がする。
最初の頃のおっかなびっくり触ってたカンジはどこへいったんだ。

「目は夜まで使うな」
「ハイ…」
手がかかってすいません。
頭にぐるぐる巻かれた布はさっき裂いた遮光布なのだろう。光を

あまり感じない。
暗くて見えなくて明るくても見えないとか、どういうことなの。
微妙にヘコむ。

しかしアレだな。
「暑いです」
このコート貴方のですよね、サイズが合わなさすぎて手が出ないどころか足も出ていないんじゃないだろうか。
もそもそ布の中で動いて探ってみる。　…わかんない。何処が出口だ。

そうやってわたしが遊んでるあいだに、彼はこのコートを取り出したクーラーボックス（仮）から次々と何かを取り出して身につけているようだった。
がたがた物色する音の振動がそのままお尻に伝わってくるから、クーラーボ（仮）とわたしが座っているものは繋がった、同じ物体らしい。

もそもそ、もそもそもそ。
首まわりならおっきすぎてゆるゆるだから手も出るんだけどなあ。

「脱ぐな」
うひ。
「人間が直射光に触れてどんな損傷を受けるのか予測がつかん」
「…ハイ」
襟から突き出していた手をしおしおと引っ込めた。
怖いことをおっしゃる。おとなしくしていよう。
砂漠の太陽で火傷するって聞いたことあるけど、そういうことだろうか。

「水は」
「ハイ！　欲しいです！」
ぐいと顎を軽く持ち上げられたのでちいさく口を開けた。ここに来るまでの道のりでもう何度か貰っているので、慣れたものだ。
する、と入り込んできたものにぱくりと吸い付いて、溢れた液体を嚥下する。

甘い。　…でも物足りない。固形物食べたいなあ。
口寂しさに、舌先でつるっとそれを撫でる。

急に引き抜かれて、ついでに顎に触れてたものも消えて、飲み込みきれてなかった甘い水が唇から顎を伝ってぽたりと落ちる感触がした。

…あれ？

ちょっと遠いとこでじゃりっと足音が。
なんだろう、もうちょっと欲しかったんだけど何かあった？

じゃり。

じゃ、

じゃり　　じゃり　じゃり　じゃり

足音が戻ってくる。

？？

そのまますぐ近くまでやってきて、彼はわたしが腰掛けているクーラー（仮）に触れたようだった。

ぎしっと革製品が擦れる音がして、クーラ（仮）が軽く沈んではねる。

かちゃり、小さく金属がかみ合う音の直後に、お尻の下のクー（仮）がうなりをあげた。

どるん、どっどっど。

エンジンの排気音！

そういえば自動二輪使うっていってた。

クーラーボックス（仮）改めバイクさんでしたかー！

クーさんですね！

脳内でそんなアホなことを考えていたら、腰の辺りをぐいーっと引き寄せられた。

「わ」
クーさんの上をずるずる滑って、もうだいぶ馴染んだつるつるでごつごつな感触の人に半身がぶつかる。
条件反射的にびたっと張り付いたけど、なぜか押しやられてクーさんの上に身体を倒された。ななんで。

「ザンツに着くまで４時間程だ。それまで耐えろ」
ぎしり。おそらくは座席の革が鳴いて、彼はわたしに覆い被さるように体勢をかえる。
苦しくはないけどちょっと圧迫された。

ああー、そうか。
運転する人の前に乗ろうとするなら狭い空間にぺったり伏せているしかないんだ。
手も足も出てないてる坊主な今のわたしじゃ、後ろに乗ったらすぐに転げ落ちそうだし。
でも耐えなきゃならないほどツライ姿勢でもない。

「寝ててもいいですか！」

どるるるん。

「眠れるならな」

あ、なんかちょっと呆れられてるー！

3　Familiar（後書き）

わかる人はわたしといっしょにニヨニヨしてればいいとおもうよ！
そんな俺得小説でごめんなさい。
わからない人は蜂とか鳥の生態ちょうおすすめ。楽しいよ！

4　Comprehension

結果的に寝たかそれとも眠れなかったか、どっちだったかというと。

…眠れませんでした。

めちゃくちゃ暑かった！　いや熱かったんだ！

最初はすぐに寝ちゃってたんだ。

目が見えないと他にできることもないし、三日ぐらい何も食べていないから、体力も落ちて貧血気味で、ぐったりしてるわけで。

バイクに伏せってうとうとしていたんだけれど、だんだん、じりじりとね。

熱いの。バイクが。

フライパンの上の目玉焼き気分になれそうなくらい。

わたしの上に覆い被さってる人と触れてる背中のほうが冷たく思えて、いっそ後ろに乗せてほしいなって考えてた。

でもどがーんって、バイクが跳ねて。

あれはけっこうとんでたんじゃないかなあ。一瞬だけど、完全に身体が宙に浮いてた気がする。

すぐに捕まえられて引き戻してくれたから、わたしは転がり落ちなくてすんだんだけれど。

その時に浴びた陽光が、まるで火に触れたみたいに熱くて痛くてびっくりした。

目が見えてなくてもわかるくらいだから、こんなの5分で皮膚がどうにかなっちゃうなって。

ああ、いままでわたし日陰をつくってもらってたんだなって。

あとはもう何が起きているんだかさっぱりだったけど、大怪獣戦争だった、音的に。

土がどじゃーって、どすーんって音がして、砂煙でじゃっりじゃりのげほごほで、なんかものすごくおっきい生物の鳴き声っぽいのが、おおおーんって。

揺れるバイクにぎゅうっと押し付けられて、けっこう苦しかった。

どうなるのかと思ったら、背後でかぽがしゃ、ぽんって音がして。遠くでどーん。

それで、おっきい生物の気配はしなくなった。

――ぽんってなんだろう、ぽんって。

とか考えてたら、どうやら寝る間もないまま目的地、ザンツとやらについたらしかったのだった。

…ぽんってなんなんだろうなー。

※　※　※　※　※

ざわざわと、人の気配がする。
いろんなにおい、いろんなおと。

ゆっくり進むクーさんの上で周囲に耳を傾けると、人々の会話が日本語とまったく違うことにすぐ気が付いた。
どう頑張って聞いても、英語ですらないようだった。

うん、そうかなあとは思ってたけど。
英語以外の言語の国なんてオチ…も無さそうだなあ。

やがて停止したクーさんから抱え上げられたので、おとなしく手足を縮めて身をまかせた。
いろいろだるくてもう自分で動ける気がしないです。ぐったり。
彼のじゃりじゃりと砂を踏む音が途中で変わって、どうやら屋内に入ったらしかった。

内容のわからない会話が、重くなった思考の外でするすると流れていく。

かしゃぎゅぎゅ、
ぴぴっ
！？

両耳を何かに軽く圧迫されて、びっくりした。
なんだろ、ぴぴ？
電子、お　ん　――――
な　に　が
ｄｅもそれ、繋がったままじゃ不便だろ？　どうすんだ」
「複写する。媒体を寄越せ」
「へいへい。書き出せんのか、アンタの。オレも欲しー」
……！？
「聞き取れるか？」
なにこれ、耳鳴り、みたいな、言葉の内容が――――
「どうよ？　コレが駄目なら埋め込むしかないけど。でも人間は開くとすぐ死ぬらしいしなあ。おーい。もしもーし」
脳に直接圧力がかかってるみたいな、むりやり意味が頭に入り込んでくる、なに、これ、
「駄目なんかな？　動かないけど…いってェ！　なんだよちょっと触るくらいいいだろー」

何を喋っているのかわかる、けど、こんな感覚、知らない。
音はわからない言葉のまま、頭の中で勝手に理解させられてる、みたいな。
「なん、ですかこれ」
「翻訳機だ」
「うっひゃ喋った！　なあなあ何て言ってんの？！　やべーコレすげー！」
「頭が、ぎゅうって」
「おわーヨダレでる。　ちょっとさあ、味見しt　　」
「多少の反復が必要だが、無理ならば外す」
「…悪かったって。喰わないって。ちょっとした冗談だからさ、抜いてくれよ…」

――なんだかハイテンションな人がひとりいるみたいだけど。
「どうして、わかるようになったんですか、コレ」
「やべやっぱウマそ　　…ごめんって」
「受けた情報を翻訳して脳に伝送している。問題ないならこのまま使え」
「なあなあなあー。どうなの上手くいったの？　人間にも使えんの？　抜いてくれよう熾青のダンナー」
がったがったがった。この場に居るもう一人の声がするところから、何かを揺らす音がする。

「これでいい。次だ」
彼は数歩、その声の主の近くまで歩いて「抜く」ということをしたらしい。
…しゃりんって、薄い金属、刃物を撫でたときみたいな音がしたよ。
「ふーもう容赦ないんだからさー。えーっと、ゴーグルだっけ。そ

の子ちっちゃいからなあ、クライン種用ので使えっかなあ…」
がたがた、ごそごそと物を漁る音がする。
「でも中央にくれちまうんならそこまでしなくてもよくねー？　もったいないなあ、オレなら内緒で喰っ…いやなんでもないって、あホラこれとかどうよ」

…さっきからなんか味見とか喰うとか不穏な言葉が聞こえてますが、この翻訳機壊れてないよね…？

彼の腕から、平らなところへと腰掛けさせられた。
顔の上部分を覆うものが押し当てられる。
大きな手が角度をちょいちょい変えて、何かを確認しているようだった。
「目を閉じていろ」
わたしの顔に巻かれた布の、後頭部にある結び目が、解かれていく。押し当てられたものはそのままに、横からしゅるしゅると布が引き抜かれていった。
ハイテンションな人の言うところの、ゴーグルなのだろう。ベルト部分が後頭部にまわされ、きゅっと絞られる。
暗闇から出た直後に感じた、まぶたを突き抜ける痛みはない。
そうっと、開けてみた。

灰色がかって色味の薄い世界が目に映る。
焦点が合わなくて、ぼんやりとしてなかなか像を結ばない。

「どうどう？　見えるー？」

上からひょいと覆い被さるような影が現れて、

！　！

心底びっくりした。

うん、人間じゃなかった。

ちゃんと見えたわけじゃないけど、とにかく鋭く尖った乱杭歯が一番に目に入って。

『人間は』『人間に』そんな台詞あったけど、味見とか喰うとかって、冗談でも比喩でもなくて、もしかしなくても、ほんとの。

ぎゅうっと心臓が縮み上がる恐怖に、後退ろうと後ろへ手をやって、でもそこには何もなくて。身体がぐるっと反転した。

けど「あ、落ちる」って思うと同時に、馴染んだつるつるでごつごつの感触に抱え込まれて、すぐさまかじりついた。

「えーオレにビビってダンナに懐くってどういうことよ」

納得いかねー。

そういう声に、わたしはそろりと視線を上げた。

『ダンナ』と呼ばれた『彼』は、黒くて、感触どおりにつるつるでごつごつしてそうで、目とか鼻とか口とか、それにあたるパーツはあるけれど、およそ人間らしさがなんにもない、そんなヒトだった。

…

振り返ったら、ハイテンションなヒトが、ん？　と首を傾げてた。
目はある。鼻もあるし口もある、すごい牙だけど。
いちおうは柔らかそうな皮膚で、髪の毛生えてて、どっちがわたしと近いかっていったらそっちなんだけど。

…

とりあえずわたしはつるつるでごつごつなヒトに張り付いた。

だって、ね。
そうしてると、安心だったんだもの。

4　Comprehension（後書き）

題に英語つかってますけど英語わかんないんですよ（´・ω・｀）
なんだこれおかしくね？　って思ったバイリンガルな方、突っ込み待ってます。

5　Reliance

まず最初に言われたのは、あまり喋るな、という事だった。

「オレ人間見たのも初めてなんだけどさー。すげー美味そうな声してんのな。人間は肉食わない？　あれがじゅーって焼ける音、聞いただけで腹減るだろ。生が美味いっていう話、そういうことだったんだなー」

……声をスパイスに、生で食べたことのあるヒトがいらっしゃるんですね。

にんげん、を。

人間というものは、とてもおいしいもの、らしい。

そんなこっちが震え上がるような話をさらっと語って、ハイテンションなヒトは口角をぐいっとあげた。尖った乱杭歯がますますよく見えて、ごめんなさい笑っているのか威嚇しているのか判断できかねます。

「まあね、喋ったトコでその日本語っての知ってる奴いないから、黙ってるほうがカシコいよね。ダンナみたいに言語情報持ってる奴はそうそういないんじゃない？」

えーと、喋るとおいしそうって思われちゃって、喋っても話は通じないってことは。

わたしは、わたしを左腕一本で抱えてるヒトの、おそらくはこの

辺が耳かなあって場所に唇を寄せた。形状が違いすぎてちょっと自信ないけど。
「じゃあ、喋りたい時はこうやって、内緒話したほうがいいですか」
そおっと小さい声でささやく。

…あれ、反応がない？

く、と彼がわずかに首を動かした。
…見つめられている、ようにみえるけれども、焦点のわかりやすい眼球がないヒトだから、どうなんだろう。
「なあなあ、嬢ちゃん名前あんの？　オレはねー、この雑貨屋の４代目、フリップってんだ。熾青のダンナとは生まれた時からのオツキアイー。嬢ちゃんはー？」
ごとごとと、奥のほうの箱を漁りながら、ハイテンションなヒトはそう名乗って、問いかけてきた。

ざっかや。
なるほど、今居るこの建物はフリップさんちで、雑貨屋さんなのか…ごちゃごちゃしすぎてよくわからないけど。
さっきわたしが落っこちたらしいカウンターだけが、かろうじてお店っぽい雰囲気を醸し出している。

それから。
わたしを抱えているこのヒトの名前は、熾青＞しせい＜さん？
「わたしは、澪です。ミオ」
また美味しそうって言われないように、ささやいた。

「ミオ」
復唱するように呼ばれたので、うんうんと頷く。
わーやっぱり美声。電子的だけど。
「あなたは熾青＞しせい＜さんでいいですか？」
「それは名ではない。名は、無い」

え。

「なんだよ内緒バナシー？　ほら」
ぽいぽい、フリップさんが連続して投げた円柱状のものを、ぱしぱし、彼が右手ひとつで受け取る。
いいなあそれ、手がおっきいヒトだけができる特権だよね。
「水とねー、アッフェの果汁。それなら人間でも大丈夫だと思うんだけどさ。で、人間って何食うの？」

え。

――何を食べるのか？
それを確認しなきゃならないくらい、ここのヒト達とわたしは違うんだろうか。
「…そもそもアッフェが何かわからないです」
ぽろっとそう口にしたら、フリップさんの牙の間からヨダレが落ちた。
「あ、やべ」
じゅるっ

…うん、違ういきものっぽい。

「飲んでみろ」

かしゅっと空気のふき出す音がして、彼の手元に視線を落とすと、円柱状のものの縁を尖った親指で撫でるようにして、回してスライドさせていた。

まるい面の部分に三角の穴が現れる。

あ、これ缶飲料なんだ！

差し出されて受け取った。材質は金属じゃなかったけれど、すごく馴染みのあるカタチ。

まず鼻を寄せてにおいを嗅いでみた。　…フルーツっぽい香り。

おそるおそる傾けて、舌を出して舐めてみる。

「りんご！」

りんごだあああ。

厳密に言うとちょっとクセがあって、わたしの知ってるりんごとは少し違うものみたいだったけど、これはりんご！！

久しぶりに舌を潤す甘酸っぱさが嬉しくて、ごくごく飲んだ。

「なるほど、喰ってみりゃいいか」

フリップさんが舌なめずりをしながら言う。

…それ、ヘンな意味はないですよね？

「んじゃ食いに出よう。嬢ちゃんにはダンナのコートの代わりにオ

レの古着をやるよ。中央府の保護条例なんか守る奴いないもんなー」

そういってお店の奥に行って帰って来たフリップさんがもたらしたものによって、わたしはてるてる坊主からペンギンに進化したのだった。

――――フリップさんも大概的にでかすぎると思うんです。

袖をまくってまくってようやくちょっぴり指先を発掘したわたしの隣で、自分のコートを取り戻した彼がぎゅっとフードを深く被る。

そうすると、元々の体色が黒いのと相まって、フードの陰の顔がほとんど見えなくなった。

わたしも絶対顔出さないようにしろよってフードを被らされているので、　…なんですかね、このあやしさ満点大小フード族。

そう、着替えるために腕から降ろされてびっくりしたんだ、わたしの身長って彼の腰くらいまでしかなかった。

そりゃてるてる坊主にもなるよっていう。

フリップさんも胸の下に届くかどうかってくらいで、おっきいヒトだった。

…違うかな、きっとわたしのほうがコビトなんだ。

だってお店のカウンターがすでにわたしは背伸びしないと覗けないレベル。

「今日はもう店じまいっ！」

私にとっては壁同然のそのカウンターを軽々飛び越えて、フリップさんはすとーんと華麗に着地する。
「じゃ行こっかー」

開け放たれた扉の先に、知らない世界が四角く覗いていた。

道行く人のほとんどは、フリップさんとよく似た容姿をしているようだった。
けれど、わたしと同じくらいの身長で、髪の毛のない人たちもちらほら見える。
建物は石造りのものばかり、　で、

ざーっと視界が暗くなった。

斜めになっていく身体を馴染んだ腕がさらい上げてくれて、それに取りすがる。

甘かった。

本当の意味でわかってなかった。

ここ、わたしの居たところじゃない――――!!

暗闇でみる一瞬だけの夢かもしれないなんて楽天的に考えてたんだ。

ぼんやり聞くのとは違う。

視覚で感じる衝撃は全身を突き抜けるようだった。

手足が酷く冷たくなって、ぶるぶる震えてぜんぜん思い通りに動かない。

どうしよう、こんなとこしらない。

あのヒトたちほんとうににんげんをたべるの。

こわい、たすけて、

「どうした」

ああ――――!

ぐるぐると荒れ狂うものが一気に溢れてまぶたから零れ落ちた。

ひくっと咽喉がなって言葉にならない。

「ミオ」

必死になって声の主に縋りつこうと手を伸ばした。

そこだけしか、残っていないような気がして。

「ミオ」

そうしてると、安心だったから。

ミオ

―――

5　Reliance（後書き）

（´・ω・`）泣きつかれ。
ごはんおあずけでカワイソウ。

6 Process

――のど、いたい。

なぜだかひどく開けにくいまぶたをどうにか動かして、ぱちぱちとまばたきをした。

きゅる

――そこにいるの？

視界は暗かったけれど、うっすらと物の陰影がわかる。あの地下のような、完全な闇じゃない。

わたしは、柔らかで、平らなものの上で横になっているようだった。

どこ。

すごく、さむい。

重たい腕を伸ばして探ると、大きな硬いものに手のひらを捕らえられた。

そのまま首筋に引き寄せられ、身体を抱え上げられたので、べったり張り付く。

ほっとした。

きゅる、

もうこの『声』を不快だと思わなくなっている。

かちゃり、頭上で音がして、両耳に軽い圧迫があった。ああ、翻

訳機。
そのままどこかへ運ばれてゆくのに身をまかせた。

ぎい、と音を立てて割れた隙間から光が差して、その中へと入ってゆく。

白い、壁の、部屋。…まぶしくてよくみえない。オレンジの光があちこちに、置いてある。
「あら起きたのね。食事はできそうかしら。座れる？」
じゃっ、と手慣れた風に鍋を揺するヒトが振り向いて、そう言った。
おいしそうなにおいが部屋一杯に広がっている。

まぶしさに目を細めていたら、また別の誰か――――テーブルについて座っていたらしいヒトが、中央のいちばん大きな明かりに手を伸ばした。きゅうっと光が小さくなって、だいぶ目が楽になる。

「ごめんねー。うちの弟にさんざ脅されたあげく、無理矢理外に連れ出されそうになったんですって？」
すごく優しい声だった。
「脅してねえよ」
テーブルのヒトが言う。拗ねた口調のこの声は、フリップさんだ。
「馬鹿ね、怖がらせたんだから脅してるっていうのよ。自分を食べるかもしれない種がたくさん居る所に出て行きたいわけないでしょ

う」
かんかんかん、おたまらしき器具で斜めに傾けた鍋の底を軽く叩いて、料理をお皿に移す。
…おかあさんの、しぐさだあ。
フリップさんがテーブルの上の水差しから陶器のコップにとくとくと注ぎ、ん、とこちら突き出した。
空いている椅子の上に降ろされそうになって、思わず彼の首にかじりつく。
「あらぁ」
「なー？　ダンナが平気なら大丈夫かなってさー。最初は平気そうだったし」
「そうねえ。　…そのまま二人一緒に座っちゃいなさいな」
水平にした手のひらをひらひらと上下に軽くふって、そのヒトはにっこりと笑った。
…うん、笑った、っていうのがわかる顔立ちだった。
フリップさんは歯医者さんで歯列矯正してもらってくればいいと思います。
「ダンナ、みーずー」
ちゃぷんと揺らす催促に、彼はわたしを抱えたまま、椅子に座って受け取った。そうしてそれをわたしに持たせる。
…駄々っ子みたいでごめんなさい。なんだかすごく座りにくそうだった。
「お水が飲めたらこれをどうぞ。たぶん食べられると思うんだけど。熱いから気をつけてね」
目の前のテーブルに深めのお皿と、スプーンが置かれた。

ほかほかの湯気。
やさしいかおり。
おかゆ…オートミールのほうが近いかな、穀類を煮込んだような。
すごくおいしそう。

そう思ったけれど、のどが張り付いたようにうまく動かなくて、乾いていたことを思い出した。
慌ててもらったコップの中身を流し込む。
「姉ちゃんオレも喰っていー？」
「全部はダメよ、あんたのために作ったんじゃないんだから。食べられそうかそうでないか、ちゃんと聞いてからにして」
「へーい」
返事をするやいなや、すぐさま口へ運んだらしく、食器のぶつかる音がする。
「あ、こら！　…まったくもう」
仕方ない、というふうに溜息をつき、そのヒトはわたしに向き直って柔らかく声をかけてきた。
「ごめんなさいね、怖かったんでしょう？　大丈夫よ、そんな馬鹿なことさせないんだから。さ、食べて」

――――そうか、怖かったんだ。

だいじょうぶって言われて、じわっと涙がにじんでしまった。
誰かにそう言って欲しかったんだ。心細くて。

持っていたコップをそのヒトが引き取って、かわりにスプーンを持たせてくれる。
どうぞ、と手渡されたお皿があったかくて、うれしくて、夢中で

すくってわたしは食べた。

ゆっくり、染みこむような、かすかに甘いあじ。

おいしい。

「まったく、大の男が二人そろって女の子ひとり慰めてあげられないんだから、困っちゃうわねー」

ごふ。フリップさんの咽喉がなった。

「おろおろしてるだけなのと、棒立ちになってるだけなのと」

ぎ。後ろのほうでも咽喉がなった。

「頭のひとつでも撫でてあげればいいのに」

ふう、と芝居がかったしぐさで溜息をひとつ。お姉さん。お姉さん、おねえさん。

「…ごめん、ミオ。腹減ってるって聞いたからさ、外で食えるもん探したほうが早いかなって。そんなに怖がってると思わなくて」

そう言うフリップさんの顔は、　…これはきっとしょんぼりした顔なのかな、微妙に目じりが下がって眉間がきゅっと寄ってます。相変わらずコワイ顔です。

――――ふふ。

すごくやさしいヒトたちだ。

「あり、がとう」

思わずそう言うと、一瞬ぴたっと皆が止まった。

、あ。

喋らないほうがよかったかな、そういう思考に被せるように、ぅうん、とフリップさんが咳払いをした。

「オレね、ダンナからニホンゴの情報もらったんだよ。だからわかる」

…わかるって、どういうことだろう。フリップさんはわたしみたいに翻訳機を使ってるわけでもないのに？

首を傾げると、わたし以外の皆が互いに目配せしあったようだった。

「うーんと。もしかして萌芽したばっかりの子って何もしらないのかな？　どこから話すべきなのコレ？」

「血統を偽った複製の疑いがある。何れにせよ記憶の欠落、或いは操作があるようだ」

…なんのことだろう。

「…お茶を入れるわね。ゆっくりお話したほうがよさそうだわ」

「じゃあ、『今』の最初から、かなー。ミオ、世界はね、一度壊れたんだよ」

※　※　※　※　※

長いながいお話だった。

饒舌で、でも端折りがちなフリップさんのおはなしに、ときおりお姉さんと彼が補足を付け加えながら。

世界は全て、壊れてしまったんだそうだ。

なぜ、どうして、なにがおきてそうなったかは、誰も覚えていないらしい。

世界が壊れるとおなじに、人も壊れてしまったから。

何もわからない人たちはそれでもどうにか生き続け、ヒトとして暮らし始めて、世界が壊れる前の遺物を見つけ出し、それを利用することを覚え、今は生活している。

わたしの翻訳機もその遺物のひとつなんだそうだ。

フリップさんも、頭の中にそれを埋め込んで使っているらしい。

翻訳機を使っているヒトはそこそこにいて、その理由は、壊れたヒトの中には発声の器官のカタチすらまったく違うものになった種がいるからだと。

そもそもの同じ音を出せないヒトもいるのだ。

――彼の声が電子的なのは、そういうことなのだろう。

その遺物がとても便利なことから、人々はその恩恵により与れる

場所に集まって住むようになった。
そういった遺物がよく見つかる所には根っこがあって――形状が木の根に似ているからそう呼ばれているけれど、とてもとても大きな、ものによってはてっぺんまで登るのに何日もかかるような巨大なものが、地中からうねるように生えているらしい。

そうして、根っこは稀に、芽を生やす。

小さな芽が成長し、開いた双葉に抱かれてあらわれるもの。

それが、人間。

『萌芽』とよばれるその現象がなぜ起きるのかは、誰も知らない。ただ、この世界で、人間とは、そうやって突然うまれてくるものなのだ。

壊れてしまう前の正常なカタチをしたそれは、壊れて歪んでしまったヒトにとって、羨ましくて、ねたましくて、欲しくて欲しくて仕方のないもので。
だから食べたくなってしまうのかもしれないと。

悪いヒトたちの中には、それを利用して儲けるために、遺物を使って複製したり、こどもを産ませてふやし、売ったりするヒトもいるらしい。

けれども、壊れる前の人間は、壊れる前の道具――遺物を上手く扱えるものが多かったので、中央府というところで保護をはじめた。
おなじ人同士で暮らしていく、よりよい生活のため、人間を守りましょうね、と。そういう『保護条例』が、今はあるんだそうだ。

つまるところ、わたしは。

『萌芽』直後に捕まるか、不正な出産からうまれて。

立派な、壊れる前の人間ですよと、付加価値をつけるために、壊れる前の世界の知識を植えつけられているのではないか、と。

そういう、ことらしかった。

「今は傘がそっぽ向いてるから無理だけどさ、十日後に通信が繋がるはずだから。そしたら中央の保護局に連絡とってやるよ」

ちゅうおう、ほごきょく。

彼は最初から、わたしをそこへ連れて行くつもりだった、らしい。

6　Process（後書き）

ながい世界観説明取り敢えず終了おつかれさまでした。
またいずれあるかと。

7 Desire

フリップさんのお姉さんは、サニという名前なのだそうだ。
結婚していて、二児の母。ザンツの中心街に、旦那さんと家族４人で住んでいるらしい。

あれから寝込んでしまったわたしのために、ちょくちょく街のはじっこのフリップさんのお家――実家に帰ってきて、面倒をみてくれた。
フリップさんは実家でひとり暮らし。
空いている部屋はあるけれど、病人の看病が出来る甲斐性はないからね、とお姉さんは苦笑ってた。
おなかがすいてふらふらだったのと、自分のいままでの根底をひっくりかえすようなおはなしを聞いて、ショックでわたしは三日もベッドの中でごろごろしていたけれど。

もっとショックになる話をフリップさんから聞いて、わたしはもそもそとベッドから出ることにした。

――『彼』はわたしが寝込んだその日から、もうザンツを出てしまって、居なかったというのだ。

フリップさんは引き止めたらしいんだけれど、わたしの体力回復には休養の時間が必要で、その間ここに留まっていても意味が無いと。
彼の仕事をしに、行ってしまったんだって。

…置いていかれちゃった。そう思った。
ものすごーくしょんぼりしてる自分にびっくりした。

あの硬い喋り方からして、機械的で無駄をあまり好まなそうなヒトだから、だらだらしてるわたしなんかに付き合おうとは思わないんだろう。
それでも、傍にいて欲しかったと、傍にいたかったと、思ってしまって。あのヒトがいてくれると安心できるから。

彼は、中央府の、人間管理保護局、というところへ私を連れて行ってくれるつもりであるらしい。
…正直にいうと、そんな見知らぬところには行きたくなかった。
わたしには帰る場所があったはずだ。
自分の今までの記憶が嘘かもしれないなんて、思いたくない。
けれど、この世界のどこにも故郷はもう無くて。
人間が一人でふらふらしていたらすぐさらわれる、そういう場所で。
特にここ、ザンツは砂漠のはしっこにある辺境の街で、根っこもない、治安が悪い土地なんだそうだ。
だからこそわたしみたいな――犯罪に関わっている可能性のある人間が、近くにいたんじゃないかと。
そうして、ザンツにいると、そういう悪いヒトに見つかってしまうかもしれないから。
わたしは保護局へ行くべきだ、と。皆はそう思っているようだった。

でも、家に帰れないなら、せめてここに、彼の傍にいたい。
わたしはそんなふうに考えていたんだ。
でもそれってすごく依存していて、わがままだ。
自分の身ひとつ守れないのに。

ここに来るまでずーっとお世話になって、助けてもらって、なのにまだ甘える気でいたのか。

それを見透かされていたかのようで。
情けなくなった。

――起きよう。
体調はもうほとんど問題ない。

きっと、お世話になったあのヒトたちと一緒にいられる時間は残り少ないんだろう。
ごろごろうだうだしているより、ほんのちょっと、微々たることでも、恩返ししなきゃ。

もそもそと起き上がって、着の身着のままだったわたしにお姉さんが借してくれた服を着る。
ちょっとサイズが大きくて、服にうもれ気味っぽいけど。

…お姉さんの、子供の頃の服だって。
うん、お姉さんも例に洩れず、でかいヒトでした。

家主を探してうろついて、雑貨屋さんのカウンターに丸まったおおきな背中があるのを見つけた。
「フリップさん？」
「ぅおわ」

そんなに驚かなくても。
振り向いたフリップさんは今日もやっぱりコワイ顔だった。主に牙が。
「ミオ。やー慣れたと思ったけどけっこークるなー」
…やめてくださいそういうの。コワイから。

フリップさんはなにやら細々とした機械のようなものを弄っていたようだった。カウンターの上に布が敷かれ、その上に工具や螺子っぽいのが散らばっている。
「もー起きていいの？　だいじょーぶ？」
「はい、いろいろご迷惑おかけしました。平気です」
頭を下げ、姿勢を正して言うと、なにやら興味深げにじろじろとみられた。
「懐かしいなー、姉ちゃんがガキん時の服だ。でかいのは姉ちゃんか、服か、どっちだろう」

「それって結局わたしがチビってことですよね！」
ほかのヒトがでかすぎるんです！
ぎぎぎ。地団駄踏みたいところをぐっと我慢したのに、フリップ

さんめ超小気味良さそうに笑い声をたてながら立ち上がった。わたしの頭を手のひらでぐしぐし、ぺんぺん。
くそう！

「休憩しよー。茶ー付き合ってー」
そのままぐーっと背筋をのばし、キッチンへ向かって歩く。
歩幅もずいぶんと違うから、若干小走り気味で後を追った。

――で、さっそくじゃあご恩返しの第一歩で、お茶入れさせて欲しいって言ったらですね。
「オレんち踏み台ないよ」

……そうきたかっ！

結局身長の都合でキッチンにも立てないわたしは、椅子に座って『お客様』ポジションにつくハメになった。
これはヤバイ、どうしよう。
身体的にも知識的にもいろいろ足りなさすぎて、ほんとうに出来ることがない気がする。
「ほい」
「あ、ありがとうございます」
目の前に置かれたカップからは不思議な香りがした。
ちょっと味の予測がつかない。
おそるおそる口をつけた。　…ほんのりあまくて、すっきりする後味。
「…あの、なにかお手伝いすることありませんか？」

「手伝い？」
「はい、掃除とかなら、わたしにもできると思うんですけど」
「別にいいよーのんびりしてて。それともヒマ？　なんかして遊ぶ？」
ことん、と首を傾げられた。
あそんじゃったらなおダメではないかっ。

「お仕事したいんです」
「仕事、ねえ」
んー、フリップさんはちょっと考える素振りを見せた。
「じゃあさー留守番頼んでいい？　オレちょっと足りない部品買いに行きたいんだ。で、その間掃除もしててよ。軽ーくホウキでささっと！」
やったあ！
「了解です！」

よし、お仕事とホウキをゲットした！

「じゃ行ってくる。誰が来てもドアは開けんなよー」
お茶を飲み終えたフリップさんはそう言って、軽いフットワークでするすると上着を被り、お金らしきものを掴み、外へと飛び出していった。
わたしは子山羊ですか。
そう思ったけれど、　…子山羊かもしれない。
うっかりドアを開けたらおいしく頂かれてしまうんだ、ここだと。
こわいことだ。

ぷるぷる首を振ってイヤな考えを追い出して、借りたホウキでさくさく床を掃く。
ここは屋内でも靴を履いたまま生活する土地らしい。砂漠の近くだから砂だらけで、掃除のしがいはすごくある。
そうして掃き清めつつ、なんとなくお店の棚を眺めてたら。

ほとんどが箱に詰められていて中身が見えないか、わたしには用途不明のものばっかりだけど。
…雑貨屋って。

銃の弾とか、しゅ、手榴弾っぽいのとか売ってるお店は。
雑貨屋っていうんですか。

すっごい無造作に箱の中でごろごろしてるー！
よくみたらあのワイヤーっぽいぐるぐるの束って有刺鉄線！
ゴーグルがあるけどその隣のはあからさまにガスマスク！

物騒すぎる！

とりわけ手榴弾にぞっとするものを感じて、じりじり後退る。
…怖いから、お店部分の掃除はあとにしよう。
怯えてこそこそと、カウンターの跳ね上げ部分の下を潜ろうとした時だった。

ばんっとお店のドアに何かが勢いよく叩きつけられ、怒号が向こ

うから響く。
「てめえフリップ！　いつまで店閉めてやがんだよ！」
ものすごくびっくりして、間抜けにも持ってたホウキを手から滑らせてしまった。
かんっ、からん。
あ――――！

「…居んなら開けろ！」
がん、がん、がん、
ドアが震えるように軋んでいる。慌ててカウンターの陰に隠れた。
蹴り破ろうとしてる――――！？
まさかそんなことしないよね、そう思ったのに。ばりっと砕ける音がした。
複数の足音がお店の中へ入ってくる。
すぐそば、カウンターの板一枚隔てたそこまで。
心臓がすごい勢いでどくどくと脈打ち始めた。

「居ねえ」
忌々しそうな舌打ち。
カウンターの上にごとんと何かを置く重い音が落ちる。それから、お店の棚を荒らすように弄る音。
「勝手に持ってきゃいい」
「型でバレる。後が面倒になるぞ」
「…くそっ！」

腹立ち紛れだったんだろう。
わたしは、背中にしていたその板が、蹴られた衝撃に。
悲鳴を、漏らして。

「こいつ、人間か！！」

「離して、離、してっ！」
めいっぱい抵抗した。
引っ張られた腕を引っ張り返して、思い切り蹴って、何度も蹴って。
「離して！」

でも何の意味もなかった。
「おい黙らせろ」
「ここじゃヤバイ、場所移せ」

あっという間に口を塞がれた。手も足も、わたしのものとはぜんぜん違う太い腕が何本も伸びてきて捕まえられた。痛い、動かない！

「ふっ、ぐ、うー！」

「はは、ははは！　何だこれ！　これが人間か！」

「早くしろ！」

「すげーな、すげー欲しい。こんなモン隠してやがったんだな」

血走って熱をもった視線が粘りつくようにわたしを見る。

飢〈かつ〉えて飢〈かつ〉えてしかたがない、焦がれ求めたものが目の前にある喜び。

――狂喜とはこういうこと、なんだろうか。

7　Desire（後書き）

ミオさんターボハムスターの巻。
（超速から回り自爆）
気になる方は「ターボハムスター」動画検索でクリック！
萌えるよ！

（´・ω・`）こんなおふざけあとがきで怒られないかちょっとふあん。

8　Ｎａｍｅ（前書き）

Ｒ１５　残酷な描写あり　タグ付作品です。
苦手な方はブラウザバックをおすすめいたします。

8　Name

「なあ、もういいだろ？　もういいよな、な」
押さえ切れない高ぶりにぶるぶる震える手で、身体のあちこちを撫でさすられている。

人気の無い、寂れた倉庫のようなところまで連れて来られて、わたしはもう離してと訴えるのをやめていた。
わたしの口からこぼれる声を聞けば聞くほど、このヒトたちは興奮し、息を荒げて狂乱していくようだった。
「啼かないのか。もっと啼けよ、ほら！」
髪を掴まれて揺さぶられる。

――ああ、せっかく誂えてくれた翻訳機が落ちちゃう…

ぎゅうぎゅうと床に押さえつけられて呼吸もままならない。
「何か言え！」
「もういいよ、喰っちまおう、俺もう我慢できねえよ」
指先をぬるつくものが舐め上げた。全身が総毛だつ。

いや――――！

たす　けて　　！！

叫んでしまいたい。離してと。でも言葉なんて通じない。

叫べば叫ぶほど、このヒトたちは悦ぶんだ。

叫んでしまいたい。助けてと。

たすけて。でも、呼べない。

たすけて。

呼びたい。でも、呼ぶ名前を、知らない――――！

涎が糸を引くその顎門は、今まで見たなによりもおぞましかった。

「い、やあああ！」

ど、と軽い衝撃があって。

腕にくい込んだ牙が痛い。けれど。

そんなことよりも。目の前の光景に意識を奪われた。

わたしの腕に喰らいつき、噛み千切ろうとしたヒトの両頬、上顎と下顎の合わせ目あたり。そこを右から左に貫いて生える刃があった。

刃の柄を逆手に握るその拳は、黒くて、ごつごつしてて。

その硬い装甲めいたつくりの節々を、ほんの一瞬青い光が、ひび

割れた炭の奥でくすぶる高温の焔のようにゆぅらりと、流れていった。

ごり。ナイフが捻られる。

「あ…っが」

そのヒトの牙が緩むと同時に、ナイフに貫かれた傷から血があふれ、呼気と混じって泡をつくり、流れだす。

がりっ。さらに捻られた。

「ァあ！」

噛み合わせようとしていた顎の骨が、差し込まれた刃によって無理矢理開かれて、外れた牙からわたしは自分の腕を取り戻した。

ナイフを握る手が後ろに引かれ、その動きに引きずられて、そのヒトはわたしから離されてゆく。

2、3歩分距離が開いたところで、唇の端に向かってナイフが振り抜かれた。

ごふっと鮮血を飛沫いて崩れおち、口と咽喉元を押さえてごぼごぼと、水に溺れるもののように呼吸に喘ぐ。

それまでを、唖然として凍りついたように見ていた他のヒトたちが一斉に気色ばんだ。

「てめえ！」

ナイフの持ち主は悠然と、血の滴る刃を軽く振るって汚れを落とし、己のコートの袖の中へと滑らせる。収めるべきものが収まったのだろう、かちんとかみ合う音がした。

「こいつッ、雑貨屋に出入りしてやｇ

黒い、風がふいたようだった。

わたしを押さえつけるために誰も彼もが姿勢を低くしていた。その高さにあわせるように、コートの彼はぐっと身体を屈め、両手を床に着く。
体格に見合うだけの長い脚が伸びて、一閃。まずそれで右側にいたヒトたちが弾き飛ばされて、入れ替わるようにそこには彼がいた。

ああ――――！

次いで、わたしの左肩を押さえて指をしゃぶっていたヒトの首を鷲掴む。
ごきりという鈍い音と、それを隣に居たもう一人と共に投げ飛ばすのは同時だった。

わたしが縋るまえに、彼の腕がわたしを囲って抱え上げる。
夢中でその首にかじりついた。

来てくれた。
いろいろなものが心の奥から溢れるようで、ぎゅうっと目を閉じて彼に頭を擦り付ける。

立ち上がって、周囲のヒトたちに向きなおったらしい彼に対して、足音の輪が遠く広がる気配がした。
「…悪かった、アンタのだなんて思わなくてさ、悪かったよ！」
それまでの熱狂が嘘のように怯えた声。
不思議なくらいの変わりようだった。

「雑貨屋から伝言だ」
すう、と彼が銃を構える。

その偉容な手に収まるにはずいぶんとちっぽけで、安っぽい装飾が不釣り合いに見えた。
「二度と来るな」

たん、たん、たん、たん、
「ッぅうああ
たん。

失われるものに比べると、ずいぶんと軽い音に貫かれて。
身じろぎひとつ出来なかった人たちは声もなく。
最後に逃げようとしたヒトもおなじように。
ばたばたと倒れて、動かなくなる。

「忘れ物だ」
彼はその上へ無造作に銃を投げ捨てると、それでもう用は無いと言わんばかりに踵をかえして、振り向きもしなかった。

…もう、いない。
あのコワイヒトたちは、もういない。

もう、叫んでも、いいだろうか。めいっぱい。
堪え切れそうになかった。まぶたの裏がぐんぐん熱くなる。

呼んじゃいけないと思った。
甘えっぱなしでいちゃだめなんだって思ったばかりだった。
でも。
「呼びたかったの」

声にだしたら、どうにもならないくらい、一気にあふれてきてしまった。

誰かに助けてほしいって、そう思ったとき、頭に浮かんだのは彼しかいなかった。

「わ、たし、あなたのこと、よ、呼びっ」

しゃくりあがってしまって、ぜんぜん喋れない。

「な、まえっ」

呼べなかった。呼びたかったのに。

名前を知らないままだったから。

「知ら、な、く、て」

喉も鼻も詰まって、身体がどこもかしこもふるえて、言葉がでない。

「呼べっ、なかっ」

それでも来てくれたヒトを見ていたいのに、涙が止まらなくて、拭っても拭ってもすぐにぼやけてしまう。

見えなくなっちゃう。

ぐいぐいと目元を擦っていたら、頭に何かが触れた。

視線をあげてみると、彼の右腕がわたしの頭上に伸びていた。

指が、ぎこちない動きで髪の間を流れて、梳いていく。

すごくひっぱられたから、きっとひどいことになっているんだろう。

「呼べばいい」

静かに、そう言われて。

「…な、んて、呼んだら、い、いですか」
「好きなように」
好きなように――名前を付けて、呼んでもいいってこと？
じゃあ。
「じゃあ――ギィ、て、呼んでも、いいで、すか」
きゅるっ
「安直だな」
…今の、たぶん笑われちゃった。
「だ、めですか」
「呼べ」
「…ギィ」
「なんだ」
…えへへ。
「ギィ」
「ああ」
ずびっと音をたててわたしは鼻を啜った。
なまえ、よべた。
うれしい。

※　※　※　※　※

「ミオ！　ああクソッ！　なんだよこの傷！　腹立つなあちょっと一発くれてこようかなあ！」
フリップさんはわたしを見るなり声を荒げてそう言った。
あちこちヒリヒリ痛いから、目立つ擦り傷でもあるんだろうか。

「無駄だ」
「…まさかダンナ、全部殺したの」
彼は無言で、答えなかった。
否定をしない。
「なんてことすんだよ！」
フリップさんは批難を滲ませて悔しげに己の頭をがりがり引っ掻いた。
「オレが殺る分も残しといてよー！！」

…えええ。
怖いです、これ、こういうのが常識…？

ちょっと血の気が引く思いでまごまごしていたら、フリップさんはわたしの視線の意味に気が付いたようだった。

「いーんだよ。あいつらがバカなんだから。前にダンナにちょっかい出して痛い目みてんだからさー。ウチの常連にダンナがいるの知っててウチにあるもん盗んでくとか。アホか死ね」
ええええ。
…『雑貨屋』と称して物騒なものを売ってるフリップさんの、懐っこい人柄の裏の一端が見えた気がしました。

彼はフリップさんのお家までわたしを連れてくると、片付けてくる、とだけ言って外へ出て行ってしまった。
「ミオは手当てな。ほら座ってー」
わたしはキッチンの椅子に座らされて、水で塗らした布であちこち拭われる。
それから薬を塗って、絆創膏に似たカンジのフィルムのようなものをぺたぺた貼って。
手足や、顔にも小さい傷がいくつかあったらしくて、結構手間がかかってしまった。
「こんくらいかなあ。他に痛いトコない？」
「大丈夫です。ありがとうございます」

あーあ。傷だらけだあ。
いろんなところにフィルムを貼られた自分の手を眺めて、ふとフリップさんをみたら。
なんていうかこう。ほっぺた片側だけ微妙に上がってて。
…にやにや笑い？

「なんですか」
「いやーこの前から面白いなあと思ってさー」
このまえ？
「いっつも人目避けて夜にしか店に来ない熾青のダンナがさ、真昼間に現れて。なにごとかと思ったらちっちゃい人間のオンナノコ抱えててさー」
わたしのことですか。
「矢継ぎ早にアレもコレもソレも寄越せって」
ぶふっ。堪えきれない、そういうふうにフリップさんは笑った。
「今日だって昼間に来たの、夜だとミオが寝てるからなんじゃないのアレ」
くっくっく。ぷるぷる震えだした。
「仕舞いにゃソコの椅子、　　…ウチの椅子にダンナが座るとかありえねー」
あはははは、と弾けたように笑い出したフリップさんは、めちゃくちゃ楽しそうだった。

「…確か、生まれた時からのお付き合いだって、言ってませんでした？」
「ん？　うん、そー。曾爺ちゃんの代から、夜に現れては黙ってブツソウなもん買ってく、そういうオツキアイの雑貨屋常連」
「ひい、じいちゃん…」
「そう。何十年も前から姿が変わらない、得体の知れない異形のヒト。ミオはわかんないのかもしれないけど、オレはいままで熾青のダンナと同じカタチのヒトは見たことないよ。ああいう姿の種は、他にはいない」
それがさー、ミオとさあ！

あははは、と笑い転げるフリップさんは、本当に、楽しそうだった。

9　Live

それから、わたしは熱を出して、またベッドへ逆戻りすることになった。

食べられそうになって。けれど助けてもらって、生きている。
わたしが生きているかわりに、死んでしまったヒトがいる。

いろいろ、考えた。

じゃあわたしが死んでいたら。生きていたら。生きていたのは。
食べられていたら。食べなかったら。死んでしまうのは。

――――わたしも、誰かを食べて生きている。

ちいさなひよこをかわいいと思う。ひよこはやがて鶏になる。
わたしは『チキン』というお肉をたくさん食べた。それってどういうことだっけ？

ぐるぐる、考えた。

いまさら考えるようなことじゃない気がして、今考えるなんて遅すぎるような気がして、でも気になって。ぐるぐる、ぐるぐる。
停滞したまま、うとうと眠って。

朝、目が覚めて。

――――生きていこう。
そう思った。だって生きている。
こんなに、おなかがすいてるんだもの。
たべることは、いきること。
わたしは、生きていたいのだ。

※　※　※　※　※

まず考えたのは、わたしはこの世界のことを知らなさすぎる、ということだった。

「おはようございます」
身支度をして、人の気配がするキッチンへ行ったら、お姉さんが鍋をかき混ぜていた。
フリップさんがテーブルの上で、バレーボールくらいの大きさの野菜？　か、果物らしき茶色いものに、ごすっと包丁を叩きつける。かなり堅そうだ。
「おはよー。ビョウキなおった？」
3分の一ほどめり込んだ包丁を持ち上げると、茶色いものがくっ

ついて一緒に浮き上がった。
さらにもう一撃、どごんっ。テーブルまでいい音がして、ちょっと歪んだ気がする。
「…ハイ」
イヤ病気じゃなくて知恵熱みたいなものですが。そう思ったけれど、目の前の豪快な所作に呆気にとられて言葉にならなかった。
もう一回、どがんっ。
テーブルの命が心配になるような攻撃にハラハラしていたら、次にいい音がしたのはフリップさんの頭だった。
「痛って熱っち！」
「力づくでやらないの！　おはようミオ、熱は下がった？　今丁度あなたの食事が出来たところよ」
つい今しがたまで火にかけていた鍋を握り締めたお姉さんがにっこり笑いかけてくる。
「…ありがとうございます」
中味は、もうお皿に移した後みたいだけど。お姉さん、もしやそれで。

フリップさんはぶちぶちとお姉さんに不満を言いながらわたしの言葉を通訳してくれた。彼は商売に必要だから翻訳機を使っているけれど、お姉さんにはないのだそうだ。
叱られて、小刻みにとんとんと柄を握った手と反対の拳で叩いている。そうしてぱっくり割れた茶色いものの中味は真っ白だった。
「ミオも手伝ってー」
お仕事ー！
半分をどんと置かれたテーブルの場所へ、飛びついて椅子の上に膝立ちになった。普通に立つんじゃテーブル高いんですよ。
たぶん取り分け用なのだろう、おっきなスプーンを渡された。フ

リップさんも同じ物を持って、白い部分をくり抜いている。
「黒い種あるから、それはこっちね。食べられるのは白いトコだけー」
「ハイ」
テーブルの真ん中にお皿がふたつ。見よう見まねでウズラの卵くらいの黒い種を片方のお皿に避け、白い果肉をくり抜いてもう片方のお皿に移す。柔らかいから難しくない。

「じゃあわたしは帰るわ。ミオ、冷めないうちに食べてね。無理しないのよ」
お姉さんがエプロンを外しながらそう言って、わたしの頭をするりと撫でた。
急いで椅子から降りる。わざわざわたしの面倒をみるために来てくれているのだ。きちんとお礼をするべくお姉さんに向き直り、頭を下げる。
「ハイ、ありがとうございます」
「ミオは『アリガトウゴザイマス』ばっかりね、覚えたわ。どういたしまして」
うふふと優しく笑うお姉さんはもう一度わたしの頭を撫でて、帰っていった。
んじゃまたねーと視線も向けないフリップさんの挨拶は軽い。ご近所さんみたいだから、こういう行き来はよくあることなのかな。
ぱたんと扉が閉じてしまうと、わたしは再び椅子の上にあがってくり抜く作業にもどった。
「フリップさん、ギィは…？」
「ギィ？」
なにそれ、と聞き返された。
そういえば名前の話、フリップさんにしてない。
説明したら、へーええ、となんだかヤなカンジににやにや笑われ

た。なんだっていうんだ。
「ダンナならたぶん裏の倉庫でバイク整備中。全部取れた？　じゃ飯にしよー」
空っぽになった茶色いふたつの皮を重ね、種をがらがらとそこへ入れて、フリップさんはぽいっとそれを部屋の隅に投げた。
ぼっすがららって金属製のごみ箱がふるえている。ナイスシュートだけどちゃんと捨てましょうよ。

そうしてテーブルの上に並べられたのは、一日寝込んでいたわたしのためにお姉さんが作ってくれたおかゆと、数種類の豆っぽいのを一緒に煮込んだものと、刻んだ濃い緑の葉っぱが浮いてるこがね色のスープ。それからぺったんこでまんまるい、たぶんパン。
あとはお肉を焼いたものもあったけれど、先日わたしがそれを食べたがらなかったので、あれはフリップさんの分なのだろう。
くりぬいた白いものには、真っ赤なソースをこれでもかってくらいフリップさんがぶっかけた。見た目はヨーグルト苺ソースがけ、ってカンジだった。
どれも味が想像つかないけど、においはすごくおいしそう。

「ギィ、呼んで来ます」
「あこら、待てって」
外に出ちゃダメ、と言われてはっとした。
そうだった、わたしは出ちゃだめだ。
「あとな、たぶん熾青のダンナは飯食わないよ」

…、そうかなって思ってたけど。

わたしはどんな顔をしていたんだろう。
わたしを見下ろすフリップさんの眉間が微妙に歪んで、眉尻が下がった気がする。そうしてぐしゃぐしゃと、わたしの頭をかき回し

た。

出会ってからの数日、わたしは何も食べられなくてふらふらしてたのに、彼は平気だった。

我慢してるとかじゃなくて、最初から用意してなかった。する必要が、なかったんだ。

…ごはん、一緒に食べられないのは寂しいなあ。

「ホラ、冷めないうちに喰っちゃえよ」

ぽんと後頭部をテーブルのほうに押されて、わたしはのそのそと、椅子に座る。

一緒にたべたいのに。

――――とりあえず、白いのはすごーく甘ったるくて、赤いソースはすっごく酸っぱかった。

ギィのとこに行きたいです。

ごはんを食べおわってそう言ったら、しょーがないなってフリップさんに笑われた。

面倒かけて申し訳ないなって思いますけど、笑われる理由がわからないですよ！

ちょっと話が聞きたいなって、それだけなのにー！

ぎゅうぎゅうとわたしはフードを深くかぶって、フリップさんの影に隠れるようにして家の裏口から倉庫へ走った。
もともと街のはしっこだから、あまり人影はないんだけれど。警戒するにこしたことはない。

「根っこ？」
「ハイ。それがいちばん、なんだかわからないなあって。イメージが湧かないっていうか」
だから、もうちょっと知りたいんです。
そういうわたしに、むーとフリップさんが唸った。
「見せてやりたいけど、こっから一番近い根っこって言ったら、五拾弐番区のじゃなかったっけ。危なくね？」
え、近くに根っこってあるんですか。ていうかごじゅうにばんくって。

「後一週間程度だ。問題ない」
工具をからんと床に置いて、バイクの向こうで黒い影が立ち上がる。響いた美声はギィのものだ。
「ダンナ張るの？　オレ店開けるからずっとは無理だよ」
静かにギィが頷く。はるってなんだろう？
「じゃいっかー。ミオ、明日の夜明け前に出るよ、今日は早く寝とけー？」
わ、実物見に連れてってくれるみたい。
「ハイ！」

ほんとに、ここのヒトたちは優しいと思う。

※　※　※　※　※

夜明け前、うっすらと地平線が輝きだすこの時間帯はまだ寒い。
ゴーグルを顔に当てて、ぎゅっとベルトを絞った。視界がグレーに染まる。
両耳を包む翻訳機に、顔半分を覆う不透明なゴーグル、さらには砂と日差し避けに首から口元まで布を巻いてしまうと、露出している部分はほぼ無くなった。
今着ているコートは『クライン種』というヒト用のものらしい。胴体部分はぴったりだけど、袖がちょっと長くて、指先まで隠れるくらい余ってしまう。
フリップさんやお姉さんは『ティア種』と呼ばれるヒトで、そのティア種のもの、・・・子供用のと比べると、クライン種の服は細身で袖が長いつくりになっている。人間と同じくらいの細さだけれど、人間より腕が長い、ということなんだろう。
よし、お出かけの準備は万端です。

ギィが運転するバイクの前にわたし、後ろにフリップさん。三人も一緒に乗れちゃうバイクのクーさんは、でっかくて軽自動車より重さも馬力もありそうだ。
フリップさんはひょいと身軽に後ろ向きに乗って、片手に銃を持

っている。
まさか自分が砂漠に来ることになるなんて思ってもいなかったなあと、遠い砂丘を見つめながら考えた。
太陽が昇りはじめるとあっという間に空気が熱せられて、じりじり暑くなっていく。
「そろそろ涌いて出るかねえ」
大儀そうに、欠伸混じりでフリップさんが言う。
出るって、なにが！？

「左だ」
「はいよー」
かぽ、がしゃっ。
ちょっと長めの銃の先端が、ギィの身体の向こうにみえた。
ぽんっ。
あ、この音、前に聞いたやつ！
そんなことを思っている間に、放物線を描いて飛んでいったそれは、離れた所で土煙を立てて現れたモノに当たって、爆音をあげた。
どーんってこういいことだったのか。
「あれ、なんなんですか？」
動かなくなってあっという間に後ろへ流れていってしまって、もう見えない。
「砂虫。獲物が移動する足音聞きつけて寄ってくるんだよ。ああいうのが砂漠の砂の中にウヨウヨいるから、ミオはヒトリで出歩かないようにねー」
…うようよ。
「このヘン、岩盤の上にだいぶ砂が積もっててさ、ヤツらの巣みたいなトコだから。頭だしてんの見たら教えてー」

…巣。

かぽんがしゃんと、フリップさんは迎撃準備に余念がないみたいだった。

「右」

ギィがそう言うのと同時にバイクが傾いて左へずれる。

もし真っ直ぐ進んでいたら確実にぶつかってたんじゃないかって場所で、ざっと砂がふき上がる。

その砂の中で、でっかい口が開いてるのを見てしまった。その口めがけて向けられたフリップさんの銃から弾がとんでいくのも。

どふって、砂と一緒に得体の知れない破片が舞い上がって、

ぎゃ――――！

…フリップさんが物騒なお店を『雑貨屋』となんだか普通なカンジに名乗るのは、ブッソウなのがフツウだからなのかなって。

そう思えるだけの時間を、すっごく『フツウ』に過ごすことになった。

スプラッタはかんべんしてほしいです。

クーさんは一度も止まることなく、ぐんぐん進んだ。

地平線まで砂だったのが次第に砂利が混じり始めて、タイヤに伝わる振動がだんだん変わって。

この先の硬い岩盤が地表に出てる場所に、根っこがあるらしい。

やがて速度を緩めて停まったクーさんのずうっと向こうに、大地の裂け目が広がっていた。
なんだろう、あれ。

すたっと軽い身のこなしでクーさんから二人が降りる。
それを見習って、ぴょんと勢いをつけて飛び降りた。
…はずなのに、予測していた着地の衝撃が足に伝わってこなかった。
かわりにあったのは、するりとわたしの身体を囲ってすくい上げる、つるつるでごつごつの。

あっれー？

もう目は見えているし、ごはんもいっぱい食べさせてもらったから、自分の脚で歩けるんだけれど。
さも当然、という雰囲気で、左腕に抱えられてさくさく運搬されている。

役目を果たしていない自分の足の先を交互にぴこぴこ動かして、歩けますよーとこっそり自己主張してみた。
ギィを見上げて様子をみる。うん、彼の視線は前を向いたままっぽい。気にも留められてない。

…歩いちゃ駄目だったりするんだろうか。
そういえば砂虫は音を聞きつけて集まってくるんだって言ってたっけ。見つからない特殊な歩き方とかあるのかな。
だとしたら、わたしは自分で歩かないほうがいいのかもしれない。呼び寄せたりして迷惑をかけたら嫌だし、黙って大人しく運ばれていよう。

そうしてそのままたどり着いた断崖の下には、途方もなく深い深淵がのぞいていた。
強い風が吹き上げてきて、身体が浮き上がりそうなくらいだった。
ギィにしがみついているのでなかったら、こんな切り立った崖の縁になんて怖くていられない。
ずうっと下は黒く染まって底が見えなかった。
光の届かない暗闇まで続くその絶壁を割るかのように、今にも動き出しそうな『根っこ』がのたうって縦横に根をはり巡らせている。
太い部分だと直径で１０ｍくらいはありそう。すごく大きい。
「あれがそうなんですか」
ちょっと身を乗り出したらギィの右手が伸びてきておさえられた。ここで落っこちるほど間抜けじゃないですよ！

根っこにはヒビ割れている箇所がいくつもあって、そこからきらきらと光を反射する何かがこぼれ落ちている。
水かなあ…？

「あれなー、ただの水だったらよかったんだけど。触るといろいろ溶ける水らしくてさ。地形もメンドクサイし、根っこも規模が小さいし。だから放棄されてんだ」
ざくざくと足音を立ててギィの隣に並んだらしいフリップさんは、その場にしゃがみこんで眼下を眺めているようだった。
こんなにおっきいのに、規模が小さいって。じゃあ標準的な根っこだともっとおっきいってことだよね。
「他の根っこもそういう、溶けちゃう水がでてるんですか？」
「ものによりけりらしいよー。タダの水が出るやつもあれば、油垂れ流すのもあるし。ほとんどがもう枯れてて液体出すのはあんまナイらしいけど」

根っこの価値は内部の遺物がどれだけ生きているか、に左右されるらしい。
内部って、根っこの中ってことだよね？

なんだかますます、わからないことが増えた気がする。

根っこは、人が活動することを前提とした空間を、内部に持っているらしい。
道具として使える遺物を内包していたり、そのまま施設として使えたり。
けれど、それらは建造物というにはあきらかに歪みがあって、ほとんどのものがまともな入り口すらなく、無作為で無駄な通路ばかりが目立ち、なによりもいちばん特徴的なのが、そこには必ず『滓』が巣くっている、のだそうだ。
根っこが枯れないかぎりそこから出てくることはないけれど、滓は人に対して攻撃的で、それゆえ遺物を手に入れるのは容易ではなく、今ではそれを攻略して遺物を持ち帰る、そういうことを生業とするヒトもいて。
ギィもその一人なんだって。

つまりわたしと出会った時のギィは、お仕事中だったのだ。

五拾弐番区。
あそこがそう呼ばれているのは、地下にある広大な遺跡の壁面にそう記されていたからで、深すぎるその位置と、遺跡を食い破るように破壊して枯れた根っこから蔓延する滓のせいで、挑む者は滅多にいない危険区域なんだとか。
ギィに見つけてもらって本当によかったと思う。

でなければあの暗い闇の底で、わたしはひとり死んでいたに違いない。

本当に、感謝している。

9　Ｌｉｖｅ（後書き）

一緒に食べるってことは一緒に生きるってこと。
誰かと一緒に食べるご飯がおいしいのはそういうことじゃないのかなあと感じるのです。

あとそれタダの過保護抱っこですよミオさん。岩盤硬えって。砂虫いねえって。

10　Advance

「あ、ミオ。明後日保護局から迎えが来るってさ」

え。

フリップさんはお店のカウンターでなにやら作業をしながら、さらっとそう告げた。

彼はバッテリーらしき箱とケーブルで繋がったものを片手に持っていて、度々その手元からぎゅぃぃぃん、とドリルが回るような音がする。

電動ドライバーかな、と頭の隅っこは推測していたけれど、要の中枢のほうは突然言われたことに大パニックだった。

今日の午前中にひとりで出掛けてった理由はそれだったんですかっ！

というか明後日迎えってどういうこと！

二日後ですか？！

いつの間にそんな話になってるんですかっっ！！

十日後に通信が繋がる、と先日聞いた。今日がその『十日後』だった。

きちんと順序だてて考えれば、フリップさんは携帯電話を持っていないし、おうちにも固定電話はないみたいだから、このザンツの街で通信設備のあるところってきっと貴重なんだと思う。

ましてや繋がる期間が限定されるなら、その時間も貴重で。もしかすると、たくさんヒトが集まって混雑するのかも知れない。

それならわたしは近づかないほうがいい。だから当事者ではあるけれど、立ち合わせてはもらえなかった。それは理解できる。

どうして突然、迎えなんて。
わたしはギィが連れていってくれるんだと、そう思ってたのに。

――ああ、違う。
連れいってくれるつもりなら、留まって通信が繋がる日を待つより、先に進んだほうが効率がいいはず。
ギィのバイクで二日で着くような距離なら、やっぱり待たずに進むのが合理的だ。
そうしないのは、バイクだと十日以上かかるような距離を、よりずっと速く進むものがあるからなんだ。
こちらから向かうより、来てもらったほうが手っ取り早い、そういうものが。
最初から、予測できることだった。

…あと、二日。
恩返しをしたい。そう思うのに、結局簡単な手伝いくらいしかできない自分が、ものすごく歯がゆい。
二日なんて、あっという間だ。

※　※　※　※　※

わたしはギィとフリップさんと、街からずうっと真っ直ぐ砂漠を北上した地点へ来ていた。
お互い身内に人間がいるわけだから、落ち合う場所は人気がないほうがいいだろう――そういう理由で場所を指定されたみたいで、このあたりで待機していれば迎えが来るらしいんだけれど。

「あちー」
…うん、暑い。

フリップさんは砂虫を警戒しているのか、長い銃を小脇に抱えたまま、その身をバイクの小さな日陰の中へ無理矢理ねじ込んで、だれている。
わたしも日差しにバテてぐったりしていたら、ギィに抱え上げられた。
熱せられた足元の砂と距離ができて、彼の長身がつくる日陰に覆われると、だいぶ楽になる。
ギィの身体はわたしの体温よりひんやりと冷たい気がして、ついつい擦り寄った。

ああ、甘えてるなあ、わたし。
…ギィは背中にめいっぱい日光当たってるけど、大丈夫なのかなあ。

そんなことを暑さでぼーっとしながら考えていたら。

いいいいいん、
空気をびりびりとふるわせるような奇妙に甲高い轟音が、ずうっと遠くから聞こえてきた。

なんだろうと周りを見回せば、空の一点に、黒い影。
それがどんどん大きくなって、次第に色と形が判別できるようになってくる。

なにあれ。

風を受ける翼もプロペラもないのに、でっかいトラックみたいな白くて長い箱がぐいぐい進んで空を圧迫していく。
金属っぽいかたまりが空を飛んでいる、っていうことは、飛行機なんだろう。
けれど、どういう原理で飛んでいるのか、外見からみてまったくわからない。

なにあれ、えすえふ――――?!

口の中に乾いた砂が舞い込んできて、自分がそこをぱっかーんと開きっぱなしだったことに気が付いた。慌てて閉じる。

フリップさんちでは、部屋の明かりはオイルを使ったランプだった。
バイクもあるし、主なエネルギーは液体の燃料で、電気が必要なときは発電機を使う、そんなカンジの生活だったと思う。
だから、わたしがいままで暮らしてた社会と『今』は文明的な差はあんまり無いんだって、なんとなく考えてた。それなのに。

…あれ、でも、翻訳機ってどういう仕組み?

やっぱりわたし、いろいろ認識が甘かった。
ずっとずっと進んでたんだ。わたしが知ってる世界よりも。

「すげーなー。話にゃ聞いてたけど、アレだけデカイ遺物がまだ生きてんだ」
フリップさんは手のひらでひさしを作って太陽光をさえぎり、上空を眺めながら感心したようにそう言った。

あれも遺物。

あっけにとられてまじまじと見上げていると、白い箱の中央あたり、一部の壁が四角にへこんで横にスライドして、暗い内部がぽかりとのぞいた。
そこに動く影が見える。
なんだろう、そう思う間もなく、それは空に浮かぶ箱から落ちて、空中でぎゅるっと縦に回転したようだった。

太陽の光を白く反射しながら、こちらめがけて落下してくる――――！

すぐさまギィは後ろに飛び退いて距離をとったけれど、砂を巻き上げて地に落ちたその白いものは、身体に纏わりつく砂埃を散らす勢いでさらに接近してくる。早い。
わたしがいるからギィは思うように動けないんだろう。瞬時に押し迫った白いそれがギィの足元を横に薙ぎ払った。
ぐるん、いつかに感じた感覚がして、視界が縦に回る。風に煽られたコートの裾がばたばたと音を立てて上へとなびく。ああ、今、落ちてる――――

ざっと砂地に着地する音と衝撃があった。
しがみついてたギィから無理矢理引き剥がされて、ぎゅうっと何

かに押し付けられる。見上げたらフリップさんだった。
振り向けば、弾丸のような速度で離れていくギィの背中が見えた。
「ギィ！」

彼の手に、いつのまにかナイフが握られている。
それをどうするつもりなのか、問う隙もなく。打ち合わされた刃が、耐えかねる力を受けて悲鳴を上げるみたいに、ぎゅいぃん、と歪んだ音を立てる。

白いものは、ヒトのかたちをしていた。
両手の甲のあたりから、ぎらりと光る両刃の剣のようなものが突き出していて、右手のそれとギィの持つ真っ黒なナイフとがせめぎ合っている。

ああ、あのひとの顔、人間だ！

その白い人の左手が動いて、ギィの腹部目掛けて剣先の角度を変えたことにぞっとした。

あとはもう、わたしでは目が追いつかなくて。網膜に残るのは、ひるがえる黒いコートの裾と、白刃がはね返す陽光と。ひどく重たい、金属がぶつかり合う音。

わたしを迎えにきたはずの人が、どうしてギィと争っているんだろう。
ギィはなにも悪いことしてないのに、どうして攻撃されているんだろう。

「やめて！　やめて。ギィ！」

駆け出そうとしたわたしの襟首がぐいと後ろに引っ張られる。
「こら待てミオ」
フリップさん、わたしじゃなくてあの二人を止めてよ――――！
砂で踏ん張れない脚と腕をじたばた振り回したら、ふいに離されて、わたしは前につんのめってコケそうになりながら走り出す。

ぽんっ。

その場を包む緊張に不似合いな、間の抜けた音がして、白と黒、二つの影はすぐさま反発する磁石のように距離をとった。
直前まで組み合っていたその場所へ、飛んできたものが爆発して、そこを中心に風が巻き起こる。
衝撃で後ろへ転がりそうになったわたしの所へ、ギィがとぶように駆けてきて抱えてくれた。

「はーいそこまでー。なんなのイキナリ。どっちもちょっと頭冷やしてよ。アンタら何しにここに来たんだよ」
呆れたように平坦な声でフリップさんはそういって、がしゃりと銃を捌く。
必要なくなったのだろうものをぽとりと砂の上に落として、新しい弾を込めて、またがしゃり。
けれどその銃口を誰かに向けることなく肩に担ぐと、芝居がかったしぐさでヤレヤレと、首を左右に振った。
「ミオのためじゃないの？」

白い人の視線がわたしに向けられる。
まっすぐ見つめられて、まず左の目が真っ白なことにびっくりした。

よく見ると目尻の近くにまぶたから頬骨に至る傷があって、おそらくはそれが瞳の色を失くす原因だったんじゃないかと想像させる、痛々しい痕だった。
たぶん三十代くらいの、男の人。
表情はとても険しくて、睨むようにこちらを見るから、正直言うとすごく怖い。
でも同時に、わたしはちょっと怒ってもいた。

白い人は、次の行動をどうするべきか考えあぐねる様子で、じりじりとすり足で重心を低くしながらギィに向かって口を開く。
「てめえ、何だ？　ヒトに擬態してんのか」

ぎたいってなに。
よくわからないけど、この人がギィを疑って、誤解してるのだけはわかる。そうして、なんだかすごーく失礼なことを言ったのも。
くやしくなってついぎゅうっとギィのコートを握り締めたら、指先に砂と毛羽立った布の感触がした。
あああ、ギィのコート、あちこち傷ができてほつれてる。
砂がついて白くなっている箇所をぱたぱた叩いた。せめて手の届く範囲の汚れくらい落としたい。
どうしてギィがこんなことされなくちゃいけないのか。
「ギィはわたしを助けてくれたヒトですよ！」

「…助けた？　こいつが？　人間を？」
ありえない事を聞いた、そういわんばかりに不信げに顔をしかめた白い人の背後に、いつの間にか高度を落としていた『遺物』がゆっくりと降りてきた。

どうしてそんな風に疑うの。
なにか言い返したかったけど、着地しようとする遺物に風と砂が舞い上げられて、邪魔される。
その砂埃が落ち着くより先に、遺物の外壁がさっきと同じようにへこんで、しゅん、と音をたててスライドした。
次はなにが出てくるのかと警戒したのはわたしだけじゃなくて、ギィもフリップさんもみたいだったけれど。

中から現れたのは、わたしと同じか、もうちょっと年上くらいの、人間の女の子だった。

彼女はずいっと白い人の前に出て、それを止めようと後ろから伸ばされた手をぴしゃりと叩きおとし、ゆっくり頭を下げる。
「突然無礼をはたらいてごめんなさい。わたくしはリーチェと申します。こちらの短慮で無作法な男はガルム、とお呼び下さい」
そう言って、ほんの少し首を傾げてにこりと笑う。

さらりと揺れる、真っ直ぐに切りそろえられた長い黒髪が、印象的だった。

11　Parting

リーチェと名乗ったその人は、少し褐色がかった翠色の瞳をぱちりと瞬かせた。
まるで人形みたいに大きい目だけれど、可愛いというよりは綺麗。そんな怜悧な美しさがある人だ。

「貴女がミオさんですね」
「あ、ハイ」

足先をもごもご動かしてギィの肩をぽんぽん叩けば、彼はわたしの意図を察してくれて、その場に屈んでくれる。

「ミオです」
わたしは自分の両足で立つと、リーチェさんのほうへ姿勢を正して頭を下げた。
彼女のまっすぐな視線はわたしを一度見とめてから、横へ滑っていく。
「それで、連絡をくださったかたは…」

「はーいオレオレ。フリップっての。そっちの熾青のダンナがミオ見っけてホゴしたヒトね」
ずっと後ろのほうにいたフリップさんがそう言いながら、さくさくと砂を踏んでこちらへやってくる。

リーチェさんはこくりと頷くと、片手にもっていた文庫本サイズの灰色のケースを横に掲げた。
それを彼女の背後にいたガルムさんの白い腕が取り上げる。彼が

動くたび、ごくわずかに機械の作動音がする、ような。
その白い両腕をよくよく見れば、すごく硬そうで、それこそまさに装甲めいていて、指や肘の関節の隙間には金属の鈍い輝きがのぞいている。
指先まで白いのは、手袋をしているからじゃない。

「クッソ砂噛んだ」
そう言って曲げる手首から、がりごりとイヤな感じの音がした。
「洗浄めんどくせえな」
舌打ちをする彼に、リーチェさんは呆れたような一瞥を投げる。
「だから砂上用換装しなくていいんですかって何度も確認しましたのに」

…機械、だ。

ケースを持ってフリップさんの方へ一歩足を踏み出した、その動きにも、微かな作動音。

この人、手も脚も、機械だ！

私以外の誰も驚いた様子がないのは、こういう技術が珍しいものではないからだろうか。
脚はズボンをはいているからはっきりとはわからない。でも腕は肩まで剥き出しで、服で覆われた身体のほうまで機械の部分が続いているようだった。
どこまで機械なのかと思わず首元に目をやってしまったけれど、ハイネックの襟からのぞく顔にかけては生身に見える。

ガルムさんはわたし達から三歩ほど離れたところで立ち止まると、ケースを差し出した。
「謝礼だ」
投げつけるように横柄な言い方で、ヒヤヒヤする。なんでこの人こんなに喧嘩腰なの？
一歩前へ進み出てそれを受け取ったフリップさんは、気のない風で視線を落とし、無造作に開く。
「…フーン。謝礼、ねー。くれるってんなら貰っとくけど」
ちらりと少し見ただけで、ぱくんと音をたてて閉じてしまうと、ズボンの背中側へそれを押し込んだ。

二人とも、ほぼ終始じーっと互いを見据えてはずさないまま。
睨みあう手前でとりあえず体面保ってます、そういう空気をどっちも隠すつもりがないみたいだ。
片や憮然と、片やシニカルに口角をあげて。共通するのは皮肉げなところと、ちょっと自嘲的な雰囲気があるような…？

「さ、こちらへ」
リーチェさんに手招きされて、躊躇する。
…これで、お別れなんだ。
振り返ってギィを見上げた。
フードの奥の、感情を現すことのない相貌が、長身の彼にとってはかなり低い位置だろうわたしへと向けられている。
どうしよう、なにを言おう。いちばんに思うことは、
「ギィ、ありがとう」
暗い地下から今まで、ずっと助けてくれて。感謝してるなんて言

葉だけでは足りないくらいだ。
ギィがいてくれたから、こうして立っていられる。
それから、ええと。

溢れそうなくらいの想いはあるのに、形にならない。
まごまごしていたら、横から伸びてきた手がぐしゃぐしゃっとわたしの髪をかき回した。
「ちょ、フリップさ、」
力入れすぎです、首ががっくがっくしてるじゃないかー！

頭を押さえられてるから、目線だけで抗議の意味合いを含めつつ見上げると、尖った乱杭歯が視界に入った。
にいっと、フリップさん笑ってる。
最初はこの顔が怖くてびくびくしてたっけ。今は全然怖くない。
だってこのヒトがとても優しいのを知っている。
「フリップさんも、ありがとう」
「どーいたしましてー。色々面白かったし、オレもアリガトウだよ」

彼は元気でとか、さよならとか、そういう別れの言葉を口にしないでいてくれて、それが泣きそうなくらい嬉しかった。
きっと、保護局へ行ったら、また会う事はすごく難しいことなんじゃないかと思うんだ。だから。

「・・・随分と、懐いてるみてえだな」
されるがままに撫でられていたら、囁くような低い声がぼそりと告げた。
「言っておく、あそこは保護なんざ名前だけの牢獄だ」
「ガルム」

被せるようにリーチェさんが厳しい声で名前を呼ぶ。制止を含む色。

どこのことを指して言っているのかはなんとなくわかった。
ろうごく。不穏なその言葉で、とたんに心細くなる。
どうしてガルムさんはそんな風に不安を煽るようなことを言うのだろう。
思わず縋るようにギィを見てしまって、すぐに視線を落とした。
駄目だ、甘えちゃいけない。

「さあ、ここは暑くて辛いでしょう。あちらの輸送機の中は空調されているからとても涼しいの。いらっしゃいな」
再度手招きされて、リーチェさんに頷きをかえした。
わたしは、行かなくちゃ。

最後に一目、ギィを見上げる。
ちょっとくらいは彼も寂しいと感じてくれているだろうか、そう思ってみつめたけれど、やっぱりその顔から感情は読み取れない。
でも、わたしから視線を外さずに、じっと見てくれているようなのが嬉しかった。
さよならは言いたくなかったから、えへへと笑って誤魔化して、せーので身体をぐるっと反転させた。

さらさらした砂のせいで不安定な足元が、自分の気持ちそのままを表してしまっているようで、妙に焦る。
こんなとこで転びたくない。

どうにかリーチェさんの待つ先へ足を進めると、彼女はわたしを先導するように横に立ってほんの少し前を歩き、飛行機の中へと招き入れた。

強い太陽光の下にずっといたから、急な明るさの変化に目が追いつけなくてちょっとくらくらする。
日除けのゴーグルを外すと言っていたとおりにそこは涼しくて、ざっと見た感じのつくりは生活感のないキャンピングカーみたいだった。
窓はなく、壁は金属の板が張ってあるだけ。
両端にそっけないベンチが備え付けられていて、中央にでん、と人がひとり上に乗って横になれそうな大きさの機械の箱がおいてある。
先頭の方に操縦席とここの空間を区切っているらしい扉があって、リーチェさんはわたしをベンチに座るよう促すと、扉の奥へ入っていった。

「牢獄ってどういうことだよ」
フリップさんの声がする。
出入り口のすぐ傍に座っていたわたしは、振り返ってそっと外を伺ってみた。
ほんとはあんまり聞きたくない、コワイし決心が鈍るから。

覗いた先にはガルムさんの後ろ姿と、その向こうにフリップさんとギィ。

こちらに背中を向けている人の顔は見えないけれど、首を傾け、がりがりと頭を引っ掻くしぐさからは、何かを思案するような様子がみてとれた。
ふう、と彼は一つ息を吐く。
「テメエらがあの嬢ちゃんを正しく庇護していたのなら――――こんなとこ来なきゃよかった、そういって嬢ちゃんは泣くハメになるだろう、間違いなくな。それでも保護局に送るってんなら、このまま

連れてくが。いいんだな」

ひご。ギィやフリップさんにそんなことしなくちゃならない義務はない。

ここまで面倒見てくれた、それだけでじゅうぶん。

お別れの、挨拶、しなきゃ、もう会え、な

ああだめだ。視界が歪んでいく。涙腺緩んじゃった、泣いちゃ駄目なのに。

挨拶…今喋ったら、きっと声が震えちゃう。本格的に泣き出してしまいそうだ。

手を振ろう。それくらいならできるはず。

ぎしぎしと、油の足りない機械みたいに動いてくれない腕と、顔を一緒に上げた。

、あれ。

目の前が真っ黒、これ、コート。ギィの。

上げかけた腕が黒い手のひらに捕らえられている。

視線をあげると同時に、けたたましい電子音が機内に鳴り響いた。まるで警報みたい、そう考える前に、機械で合成された声が翻訳機を通して頭に入ってくる。

――――警告、緊急事態、敵性体侵入、警告、緊急事態、敵性体侵入、警告――――

カメラのフラッシュのような閃光が壁のあちらこちらでちかちかと瞬いて、視覚でも注意を喚起していた。
「ぁあうるせえ。リーチェ、警報止めろ！」
ガルムさんが鬱陶しそうに表情を歪め、恐らくは操縦席があるのだろう方向に怒鳴りながら進んでいった。

てきせいたい。それが何を指しているのか、なぜ最初ガルムさんが攻撃的だったのか、理解した。
人間が造ったものが、敵であると判断したのだ。

ギィを。

フードの奥の、ヒトとは違う感情の見えない眼を見つめたまま硬直したわたしの腕から、ギィの指がゆっくり離れていく。

ああ、違う！

とっさに伸ばした両腕で、思い切りギィに掻き付いた。
めいっぱい腕を伸ばしてがっちり掴み、ぎゅうぎゅうと自分の身体を押し付ける。

このヒトは、自分が『そういう』存在だ、ってきっと知ってた。認めてたんだ。
だから、他人を避けていたんだろうか。その異形の姿をコートの下に隠して。

びっくりしたけど、わたしはギィが敵だなんて思ったことない。
敵だっていうなら、どうしてわたしを助けてくれたの。
『滓』から護ってくれて、保護局のこともわたしの『これから』を考えてくれたからで。
そうして、今、ここにいるのは――――わたしが泣きそうになってたからだ。

ギィにぐいぐい押し付けているわたしの頭の上に何かが乗って、不慣れな様子で滑っていく。

…こんな、ヒトが。
泣いてる子の頭を撫でてあげればいいなんて、そんなことも知らなくて、それしか知らなくて、無器用に撫でてくれてる、こんな、ヒトが、敵なわけない。
なのに、どうして『そう』なんだろう。

知りたくなった。

壊れる前の人間がつくった遺物が、ギィを敵だとみなす理由。
世界が壊れてしまった原因と、きっとつながってるんじゃないだろうか。

「ギィは、世界が壊れたのはなぜか、知っていますか」
「記録はない」

ギィの答えはいつも簡潔だ。
凝縮されすぎて、込められた意味のすべてを読み取るのがすごく難しい。

「お取り込み中のとこ申し訳ないんだがよ。片手間に船の電子中枢にまで侵入してくれてんのはアンタか」
めいっぱい苛立った声に振り返ると、ガルムさんが苦りきった表情で立っていた。

片手間？

なんのことかと周囲に目をやったら、わたしの頭にのっているギィの手の反対、もう一方の腕が不自然に伸ばされて、入り口横の四角く区切られたディスプレイのある辺りに拳が当てられていた。

なんだろう、インターフォン…みたいなものかな。
ものすごい速さで文字が下から上へ流れていってる。英語っぽい。

唐突にそれがぴたりと止まって、一際大きな文字が二、三度点滅したかと思うと、ぷつんと消えた――――天井の照明も一緒に。
停電が起きたときみたいに、騒がしく響いていた警報もなにもかも全部消えて。でもすぐに明るくなった。

「何しやがったテメエ」
「識別番号を入力した」
「しゃあしゃあと言いやがるな。痕跡は」
「無い」
「…ふん」
面白くなさそうに鼻をならし、ガルムさんはずかずかとこちらへ歩み寄ってくる。
「まさか同乗してくるとは思わなかったが、いいだろう。だが妙な真似するようなら叩き落すぞ」
獣が威嚇するように言いながら、ギィを押し退けるようにしてデ

ィスプレイの周囲にあるいくつかのボタンに触れた。
「ダンナーバイクどーすんのー」
外からまるでいつもとかわらない調子でフリップさんが言うのに、ギィはポケットからちゃりちゃりと鳴るものを出して投げ渡す。
「好きに使え」
受け取ったフリップさんの片頬がにいっと持ち上がる。
「へーい。まあまたご贔屓にー」
笑いながら、ひらひらと指先を振った。

え、どういうこと。

「またなーミオー！」
フリップさんの笑顔が、しゅんと音をたてて横から滑り出てきた壁に遮られて見えなくなった。

「じゃあとっとと鳥の巣に帰還しますかねえ。リーチェ」
「了解」
ガルムさんが触れているディスプレイのあたりからノイズ交じりの答えが返ってくるのとほぼ同時に、足元がびりびりと震えるくらいの重い音が唸り始める。

ぐらぐらしてわたしはちょっとバランスを崩したけど、掴まってるギィがまったく揺らがない。
これ、もう浮いてるのかな。

「ちょっと貴方がた、同じ所に片寄らないでくださいます！？　重いんです、重心がずれてさばきにくいったら！」
スピーカーからリーチェさんの切羽詰ったような声が響いてきた。
そういえばこの飛行機、今微妙に斜めになってる気がする。

「わりィな超重量で。俺と重さで張り合う奴がいるたあ思わなくてね」
そう言いながら反対側の端っこまでガルムさんが移動すると、それに合わせて水平になったみたいだった。
エンジンの音も少し低い音になったから、なんだか無理してたっぽい。

ガルムさんはどっかりとベンチに腰を下ろして、顎をあげてこちらを――ギィを威圧するように睨んだ。

…あれ？

ギィも、一緒？

12　Knight

「で。テメエは何なんだ」
顎をしゃくってギィのことを指し示し、ガルムさんが言う。
沈黙して答える様子のないギィを胡乱げに睨みつつ、彼はそのまま続けた。
「だんまりか。じゃあ勝手に推測させてもらうがな。探知機に引っかかってかつ番号がふられてる、つうことはヒトじゃねえだろう。兵器の類か」

ヒトじゃない。ギィが？

「遺物が反応するんだ、前時代からの生き残りだな。淘汰されるべき廃残のガラクタが今になって動く理由はなんだ」

矢継ぎ早に突きつけられた情報に、目が回りそうだった。
兵器。世界が壊れる前の。ギィが。
ぎゅっとギィのコートを握りしめる。指先の感覚が痺れたように鈍くなってうまく動かない。しっかり掴まえていないと、何かを失ってしまいそうな気がして怖くなった。

「…あくまで黙秘か？　それとも情報の開示を許可されていないか。んじゃあ嬢ちゃんに聞こうかねえ？　そのご執心っぷりからみるに、あんたが主だろう」

ガルムさんのするどい視線がすい、と滑ってわたしへと移される。
「その古くさいオモチャがどれだけイカれたもんかわかってんのか。

わざわざ人の形を模倣してんのは、人が居る空間に入り込む為だぞ」
瞳のない、白い左の目がひどく酷薄な光を宿しているように見えた。
「なんの事だかさっぱりって面してんな？　あんたは人間の群れの中に対人兵器を引き連れて行く気なのかって聞いてんだよ」
男の人に容赦なく睨まれた経験なんてそうない。荒い語気に肩が反射的に震える、それとほぼ同時にわたしの服の背中を掴んだギィの腕が彼の後ろにまわされて、その大きな身体の陰へと引き込まれた。
視界いっぱいに、ギィのコート。ガルムさんの視線が遮られる。
「変歪前の記録は残っていない。実行すべき命令も下されていない」
わたしを庇ったギィの、かすかなノイズまじりの声。
否定はなかった。
人間の敵で――――兵器。

…だったら、なんだっていうんだ。

わたしはギィの腕の下をくぐり抜けて彼の前へと滑り出た。背中をぎゅうぎゅうとめいっぱい押し付け、彼を後ろにやろうとしたけど、　…駄目だやっぱりびくともしない。
身長も全然足りてなくて、ギィがしてくれるみたいに全部隠して庇うなんて出来っこなさそうだけど、でも。
「ギィはなんにも悪いことしてないはずです！」

そんなふうに冷たい目でギィが睨まれるのは、いやだ。
来なきゃよかったって、もう後悔してる！

この人がなんだか先行きが不安になるようなことを言うから、ギィはもうちょっとわたしに付き添ってくれようとしたんだろう。
その結果招いたものが、彼を悪いものだと断定した視線と、尊厳を貶めるような言葉なら、最初から来なければ――――

、ちがう、わたしがもっとしっかりしてればよかったんだ。
わたしが。泣きそうになんか、なってるから。

「だ、から」

ギィを『そんなふう』に見ないで欲しい。
泣いてるわたしを見過ごすこともできないような、優しい『人』なのに。

わたしのせいだ。

情けない。
視界はあっという間に眼球に張った水の膜でぼやけてしまって、睨み返すこともできない。
こんなに涙腺弱かったっけ。
わたしは泣いてばかりだ。なんて役立たず。

からからから、
「なにをしたんです、ガルム」
凛とした声が空気を打った。
思わずまたたいた瞼から雫が転がり落ちて、視界がクリアになる。
からからと軽い音を立てていたのは銀色のワゴンだった。
リーチェさんはそれを押して進み、まんなかあたり…わたしたちとガルムさんの間までくると、足元のストッパーをきゅっと踏んでワゴンを固定する。
「女性を泣かせるような最低な真似をするとは見下げ果てた男ね」
そういって左手を腰に当て、かつんと靴底を鳴らしてガルムさんに向き合った。すらりと伸びた手足とキレイな姿勢はモデルみたいで、後ろからでも迫力あるオーラみたいなものを感じる。

「いや、ちょっと待て」
彼はそれまでわたしとギィに見せていた高圧的な態度をがらりと変えると、すごく慌てて両手をあげた。
こういうの、なんて言うんだっけ。ホールドアップ、手を上げろ！　っていう、カンジ。
「俺はこいつらに」
「お黙りなさい」
ぴしゃり。
問答無用、有無を言わせない勢いにガルムさんはたじたじになって、ベンチの上を後退る。
「大方いつもの悪い癖が出たのでしょうけれど。子供のような振る舞いをするのはおやめなさい、格を下げます。だいたいあなたは――」
口を挟む隙がまったく見つからない勢いでリーチェさんが彼を責

めだした。

…なんか小言のお説教タイム始まっちゃった。

さっきのなごりが残る鼻をすんとすすったわたしの肩に、大きな黒いものが降りてくる。ギィの手だ。

首を後ろのほうへ捻って見上げると、ぴくりと彼の指が動いた。

そのままゆっくり肩から離れて丸まった指の背が、ほっぺたに触れるか触れないか、産毛を撫でるような微妙な位置を滑っていく。

くすぐったいよ？

正面でガルムさんがものすごーく叱られてるけど、ギィはあんまり、そっちを気にしてないみたいだ。

わたしなんかに庇われなくても、元々そんなに堪えるようなことじゃ、なかったのかな。

彼の指が頬から目元まできて、どういう意図だったのかやっと気が付いた。

涙のあと。拭ってくれてる。

「ですから先々のことも考えなさいと言っているでしょう。あなたはいつもそうやって思いついたまま動こうとするんですから」

滔々と語られるお説教からうんざりした表情で目をそらしたガルムさんは、ちらりと真ん中にあるものを盗み見る。

「ああわかったわかった悪かったよ。それよりもお前、茶を淹れてきたんじゃないのか」

「あっ」

はっとしたリーチェさんは慌ててワゴンにとびついた。

そこに広げられていた白い布を払うと、その下にあったティーセットからポットを取り上げて、あたふたとカップに傾ける。
琥珀色の液体が注がれて、ふわりといい香りが漂ってきた。
これ、紅茶だ。
「ああ…ごめんなさい、蒸らしすぎてしまいました…」
しょんぼり。
まさにそういうカンジで肩を落としたリーチェさんは、じっとカップの中味を見つめ、それからわたしたちに視線を移し、もう一度カップを見つめ…
淹れなおそうかどうしようか、迷っているみたいだったから、わたしは両手を差し出した。
「それ、貰えますか」

わたしのために怒ってくれて、それでちょっと濃くなってしまったのだ。
飲ませて欲しい。

彼女は一度、ぱちりと長い睫を瞬かせてから、ふにゃりと眉尻を下げた。
「…いいかしら？　あの、本当はもう少し上手く淹れられるのよ…」
頬をほんのり赤くして失敗を恥ずかしがる表情が、なんだか、この人すごくカワイイ。
「ください」
ちょっと和みつつ繰り返し催促すると、はにかんだ微笑みがかえってくる。
「砂糖はおいくつ？」
…和むんだけど、背景にものすごくコワイカオしてる人がいて、和みきれないなあ。

どうぞ腰掛けて待っていて、と促されたので、ギィの様子を伺い見ると、彼もわたしを見下ろしていた。
ふたりでちょっと顔を見合わせてから、どちらからともなくすすっと移動して…ガルムさんの正面からずれた位置に並んでベンチに座る。

だってあの人ヤなこと言うし！

それで、ガルムさんに近いほうの場所をとるギィはやっぱり優しいと思うんだ。

ガルムさんはむすっと不機嫌な顔でベンチに片足をあげ、その上に行儀悪く肘を置くと、ギィを睨んで低く言い放つ。
「これだけは答えてもらおう。てめえに命令を下せる資格を持つのは、人間か」

「そうだ」

淀みのないギィの返答から、いろいろなことがぼんやりと透けて見える。
兵器であることが前提の質問に、肯定で返したこと。
『対人兵器』に命令できるのが、人間だということ。

「やっぱり戦争か」
くだらねえ、そういう呟きとともに、鋭い視線が外される。
「俺達はな、保護局でずっと使役させられてるんだ。おそらくはその戦争で使われた遺物を掘り起こすために」
ガルムさんはそれまでとは打って変わって静かに語りだした。

どこか遠いところを見つめるような、ここにはない何かを探すような目で。

それに気遣うような視線を投げつつ、リーチェさんが紅茶のカップを渡してくれる。

ギィは、受け取らなかった。

「全滅したってどうせ後から涌いてでる、そういう扱いで滓の蔓延る樹幹の奥へ送り込まれる。人間にしか反応しない扉を開けさせて、それさえ出来ればあとは用済みだ。負傷した奴は捨て置かれる。体面があるから外よりマシな生活はできるが、　…船を降りるんなら今のうちだぞ」

最後の言葉はわたしへ投げかけられたものだ。

樹幹とか、わからないことも多いけど…牢獄って言った意味はちょっとわかった、気がする。

でも、降りたところでわたしに何ができるんだろう。

何も…

「ミオ」

隣からノイズの混じった美声が降ってきて、思わず俯いていた頭をぱっとあげた。

口数の少ないギィに名前を呼ばれることってあんまりないから、びっくりするっていうか、なんかどきどきする。

「家に帰りたいと言っていたな」

…うん、言った、すごく昔な気がするけど、まだ一ヶ月も経ってない、ギィと出逢った時に。

頷いて返す。

彼はじっと、わたしを見下ろしている。
「今も意思は変わらないか」
――帰れるものなら。
かえりたい。ここにいるわたしは、何の役にも立たない。
「ハイ」
もう一度頷いた。
ギィは何を考えているんだろう。
彼は少し置いて、ガルムさんへ向き直った。
「記憶の改竄が疑われると伝達させたはずだが」
「…そういや、そんなこと言ってたっけか」
「聞いています。使用言語が日本語のみとのことでしたから、わたくしとガルムは事前に言語情報を書き加えてきたんです」
…そういえば、話通じてる。
「出自が不明瞭だ。設備が整った施設で調べる必要がある」
「――てめえ、保護局を病院替わりにするつもりか。確かに、病原菌でも持ち込まれちゃ困るから一度検査はするが…」
ガルムさんは呆れた顔で、リーチェさんは戸惑った様子で顔を見合わせた。
もしかしてギィ、あるかどうかも疑わしい「家」にわたしを帰そうとしてくれてるの…？
「あまりおすすめできませんわ。ミオさんは…」
ちらりとわたしをみて、言い淀む。

ガルムさんも急に難しい顔になった。
「…嬢ちゃんは特殊すぎる。見るからに『萌芽』した人間じゃない。交媾や複製にしちゃ欠けが見当たらない。完璧な健康体に見える」
「どういう、ことですか」
見た目でわかることなんだろうか。
「壊れる前の人間なんざもういないってことだ。俺達も壊れている」
そう言いながら、ガルムさんは動きを確かめるように機械の手のひらを閉じたり開いたりした。
「わたくしは『萌芽』の生まれですけれど、わたくしを複製してつくる人間はどの子も足が欠けてしまうんです」
「俺は交媾で生まれたらしいが、元からあった手足は捻じ曲がってまともに使えやしない代物だった」

――遺伝子異常。

「欠損のない身体を持つのは『萌芽』した人間だけです。『萌芽』した、25種に分類される人間だけ。ミオさんはそのどれにも当てはまらないのです」
「局に入ったら二度と外には出られんと思ったほうがいい。貴重な標本として扱われるだろう」
「不安にさせるよりはと思っていましたけれど。生きていく術が他にあるのなら、そちらを選んだほうが賢明です」
リーチェさんは申し訳なさそうに一度俯いてから、訴えかけるようにまっすぐわたしの目を見つめてくる。
「第一な、そのお供連れて局入りすること自体が無謀だ。蜂の巣突付いた騒ぎになるぞ」
「…呆れた、この方を乗せるって言い出したのはあなたでしょう、何を今更――また何も考えていなかったのですか」

再びお説教が始まりそうな雰囲気に、不味いとおもったらしいガルムさんがきゅっと口元を引き結んだ。

「中央府へ入る前に別行動をとる。ミオ」

また、名前を呼ばれた。

どうするのかと。行くのか、行かないのか、どちらを選ぶのかと、選択を迫られている。

ここで行かないって言えば、きっとギィはその通りにしてくれるんだろう。

たぶんそのほうが、わたしは安全に生きていける、気がする。

でも。

そうやって、ギィに何もかえせないくせに頼って、甘えて生きていくなんて、いやだ。

帰る場所があるならそこへ戻るべきだし、もし、なかったとしても。

「わたし、行きます」

ギィは無言のまま、頷いた。

※　※　※　※

※

目的地の中央府へは、まる一晩かかるらしい。
この飛行機には狭いけれど仮眠用のベッドルームもあって、今晩はそこを借りて眠ることになった。
わたしとリーチェさんのふたりで。
ようやくつくったスペースに2段ベッドをふたつ、ぎゅうぎゅうに詰め込んだようなカンジで、うん、正直ここにギィとかガルムさんが入れる気がしない。
縦幅も横幅もきっと足りない。
男性二人がベンチとか操縦席とか、そのあたりを選んで居るのは、たぶんそういうことなんだろうなあ。

毛布に包まってもそもそと座りのいい位置を探っていると、向かいのベッドに腰掛けたリーチェさんが語りかけてきた。
「今日はごめんなさいね。あの男は、初めて会った人間の怒る顔が見たくて仕方がないのよ」

なに、それ。すごくメイワク。
そう思ったのが、そのまま顔に出ていたんだろう。リーチェさんはちょっと苦笑いをしてから、じっとわたしを見つめてきた。
「あなたは幸運ね。人が怒るのは、大切な何かを傷つけられたり、奪われたりするからだわ。身ひとつでこの世界に萌芽するわたくし達『人間』は、どんな生物でも持っているはずの連なる系譜さえ持たない。そのことを知る前に、己が身すら取り上げられるのが人間

よ」
静かに、ゆっくりと語られる話の内容が、じわじわと頭に染みこんでいく。
…そうか、誰でも有るはずの親という存在が、無いんだ。
肉親を持たずに、たったひとり。
「生まれ落ちて何もわからぬうちに喰われてしまうか、生かされても家畜同然の扱いを受けるか…大概はそのどちらかね。保護局に収容できるのは生き延びた後者だけれど、　…どの子も皆、酷い状態で保護されるわ」

保護条例なんか守る奴いない。そう、フリップさんが言っていたのを思い出す。

「わたし…」
何も言えなかった。
死んでいたかもしれない、そういう状況で、わたしはギィに救われて、フリップさんとお姉さんにこれ以上ないってくらい親切にしてもらった。
植えつけられたものかもしれないけれど、それでもわたしは両親がいて、友達がいて、平凡な日常を暮らした幸せな記憶がある。
どれだけ恵まれた環境にいたのか、理解していなかった。
今だって、本当の意味で理解しているとはいえない。その辛さを経験したことがないから。
もしかしてガルムさんは、のうのうと苦痛を知らずにいるわたしに腹を立てていたのだろうか。
それならと、思ったんだけれど。

リーチェさんはたわいない悪戯をするこどもを見るような目で淡く笑う。
「ガルムが人を怒らせたがるのは、怒るだけの大切なものと気力が

あるなら、そう簡単に死にはしないだろうって、自分が安心できるからなのよ。身勝手よね」
…なんだか拍子抜けしてしまった。
彼も、優しいひとなんだ。
人間が、絶望から生きる意思を失くしてしまうのを恐れている。
最初はどうしてこんなに突っかかってくるんだろうって不思議だったけど。
そういえば。
「リーチェさんは最初から、ギィのことあんまり警戒してなかったみたいですけど…どうしてですか？」
不思議に思っていたことを聞いてみたら、彼女はくすくすとちいさく声をたてて笑った。
「だってそっくりなんですもの――――ガルムと。あなたを抱えて、どんな被害も及ばないように。それを第一に考えた行動がそのままそっくりなの」
…ギィとガルムさんがそっくり？
納得がいかずに微妙な顔をつくるわたしに、リーチェさんは苦笑した。
「さあ、もう寝ましょう。明日の朝には保護局へついてしまうわ、そうしたらきっと…忙しく、なるから。今のうちにたっぷり休んでおいたほうがいいと思うの」
そういって、指先で壁の一部をつるりと撫でた。そこにスイッチがあったらしい。
照明を落とした薄暗い闇の中、内緒話でもするように声を潜める。
「わたくしもね、幸運だったのよ。双葉が開く前に、保護局に発見

されたの」
彼女は、こうやって共犯者めいた告白をすることで、わたしの罪悪感を軽くしようとしてくれてるんだろう。
ああ、わたしは本当に、幸運だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0699v/

晦冥の底から

2011年10月8日02時00分発行